Practical Art " Self-powered cart + α Project2010 in Utsunomiya"

自力更生車の旅

社会芸術　vol.1

自力更生車＋α計画 "2010 宇都宮とその周辺

JOURNEY OF THE SELF-POWERD CART

Capitalistic economy has been declining these days. Now restructure of society (of Social Capital) is needed stressing on "confidence with creativity" instead of Capital itself.

経済資本主義が衰退に向かう今、資本を「創造性ある信頼」に置き換えた社会の再構築（ソーシャル・キャピタル）が求められる。

自力更生車の旅

社会芸術 " 自力更生車 + α 計画 " 2010 in 宇都宮とその周辺

目次

社会芸術ことはじめ p.5
自力更生車の活動 p.9
アートプロジェクトの展開における社会芸術の有意性　本田 悟郎 (宇都宮大学講師) p.11
SMF アートのわっ！「回遊美術館」と「自力更生車」のこと
中村 誠 (埼玉県立近代美術館主席学芸主幹・SMF 事務局) p.12
生活レベルからの芸術の社会貢献　佐藤 晴夫 (新潟市北地区公民館長) p.13
アートハウスからアートファミリーへ　高橋 靖史 (現代美術家) p.13
記録　社会芸術 " 自力更生車 + α 計画 " 2010 in 宇都宮 p.14
コメント集
参加者のメッセージ　長谷川 千賀子、 衛守 和佳子 p.19
沈 玲美、田中 清隆、渡邊 恵美子、小船 正博 p.20
クラウン ★ ミーナ W.S.P.、加藤 アキラ、吉田 富久一 p.21
安部大雅氏より吉田宛のメール p.22
吉田から安部大雅氏への返信メール p.23
ギャラリー・イン・ザ・ブルー　青木 俊子 p.27
おわりに p.27
予告「龍神プロジェクト 2011 in 阿賀野川」 p.29

創造性とはいったい何なのだろうか
そのことを、わたしたちは随分長い間、自問自問した

芸術の社会貢献の具体的なありかたとはいったい何だろうか。2002 年に「社会芸術展 "THE 市場 "」をたちあげ、まちづくりに多少なりと関わるなかで確実に見えていたことがあった。

「芸術家の創造性とまちの創造性を結びつける」こと

可動式仮設店舗とともに、桐生と調布のまちびとたちと思いを一つにした行動をとり、まちづくりから芸術へ切り込もうとした。その意味においては一定の成果をあげたが、多くの労力を費やしたものの既存の芸術活動から外れており、芸術関係者からは批判されるどころか無視された。

しばらくの間、参加者の意識の温度差と各々の現実の生活の重さ、それに芸術概念の狭小さに打ちのめされ、先に進められなくなった。その時点では、ソーシャル・キャピタルという言葉を知らず、概念構築が未熟であったと思う。

少しずつできることは　最も素朴なこと

この度 2010 年の計画では、自力更生車はその意図を象徴するとともに、車としての可動性とそれを扱う人の更生機能を併せ持つ有用性の媒体とした。前回 2002 年とは逆に、芸術家自らがまちびと（市民）として身を置く試みとして巻き返しを図った。何れも敗戦のどん底や、来るべき経済衰退後の社会状況を想定していた。

参加者を募るにつれ連鎖的に協力者が現れ、展開場所の確保や方法が確定。特に開催直前になってオリオン通り商店街に受け入れられたことで、所轄官庁や地域間の壁が払われ、自力更生車が市街地行進を可能とし、街路とオリオンスクエアの一体化にも反映する。逆境の粘り腰に手応えがあった。

●

かつてボイスは社会彫刻ということばをもって、社会に対して「意志」を持つということをつたえた。「資本とは　いわゆる金銭、お金では捕えられないものです。わたしたち人間の創造性　これこそが、唯一の資本であることが明らかになる日は来るでしょう」 と語られていたことを、後になって思い出す。

今度は貴方へあらためて問い直す。
信頼とは　創造性とはいったい何なのだろうか　と

●

この度も参加者（芸術家）の意識の温度差と各々の現実の生活の重さに課題は残る。

芸術活動は芸術家が個人の自己表現ではなく、自身が社会に貢献する立場をとることが本来の姿ではないだろうか。ただあるのは、だれもが発揮する創造性を共有することだと。

根源的なイメージにつながること
それは　大きな自然のなかで
自分もその一部と受け入れた

自然の創造にふれることによって、人は他者と不可分なことを識る。創造性を分かち合うことで人は他者と信頼を深め、相互に敬意をはらうことを識る。人の創造性は自然を畏敬し共に生み出す力が根幹（アイデンティティー）をなす。

根としての創造性を共有する信頼、これこそ社会資本としてのソーシャル・キャピタルである。そして、創造活動が生産を促し経済活動を支えることが、本来の芸術活動が向かうべき方向であり、未来へ向けたパースペクティブが開けるのではないだろうかと考える。

作家ができること —
活かされる創造性と信頼による　等身大のはたらきかけ
それは　生きる力となる

What is Creativity?
We have been wondering to ourselves for long time.

What and How the art could contribute to the society to be concrete?
When we started "Social Art Exhibition, 'THE MARKET" in 2002, we shared the interest in building/strengthen up the local are. We sure recognized:

"To connect Artists' creativities with community's creativity"

We took action with the people from Kiryu and Chofu utilizing Mobilized temporary wagons. Our intention was to transport creativity by creating the city. We saw certain results in those activities. However, despite of out heavy efforts and time, activity wasn't real artistic activities. The persons concerned Art didn't even criticize us, they just ignored us completely.

For a while, we were utterly dejected by different participants' consciousness; their idea of real lives, their narrow and naive concept of the art, and then we couldn't step forward any more.
At that moment, we didn't recognize the word, "Social capital". We were so naive on building up our concrete concepts.

The simplest thing is what we can do little by little.

In the 2010 plan, self-powered cart was the symbol of above intention and also useful media of mobility as car, with self-rehabilitation function of the person who handles the cart. On the contrary to 2002, the last time, we tried rallied to make artists themselves to act as the citizen of that place. Whole ideas were on assumption of the bottom life after defeated the war or society after the economic decline.

Invitation of participants set off chain reaction to gather supporters, then the location was decided and secured. The exhibition itself was confirmed. Especially, just before the exhibition started, Orion shopping district accepted us. This led us to go through smoothly to get permission from local authorities and remove the barrier between local areas. One after another we could see positive response even we were in hard situation. Self rehabilitation cars were permitted to have parade to unity the city street and Orion square.

Joseph Beuys used the word, "social sculpture" to convey to hold "intention" for the society. I remembered what he said;
"Capital" is something that is impossible to be defined by so-called money or finance. The day will come when it becomes clear that our only valued capital is the power of human creativity".

This time, I would like to ask you once more.
What is "trust"? What is "creativity"?

This time, there also lay the same assignment to solve difference among participants' consciousness and their different concept to weight real lives.

It would be essential for artists themselves to contribute society as Artistic activity, not just express themselves.

Only thing is to share creativities, we all have ability and chance.

To connect with the origin of Image.
That is, human being accepted the idea that ourselves are one part of the nature, living in the large nature.

By watching, touching and throwing ourselves into the creation of the nature, we recognized that we can't be separated by others. By sharing creativity, people deepen the trust with other people and realize how to respect others. Human being's creativity gets power of identity, based on awe and respect of nature. After getting power, people create something else together with the nature.

The trust which share creativity as the root, which is the Social Capital. Real art activity should step forward. Creative activity promotes production, then support economic activity. That's the way to open up perspective towards the future.

What artists can do is:
Appealing Life-sized activity, utilizing creativity and trust.
That would be the power to live.

「七輪堂」が加わり新潟へ、そして埼玉で増強、さらに2010年には宇都宮に大集結 ＋α 展開する

自力更生車の活動」

2008-2009年　メンコ屋六文堂とともに

美術の文字舞う“回遊美術館”まちなか展開“アートのわっ！”

ようやくやって来た「美術」の文字で欲わる嬉しい出来ごと。商店街と公園と美術館を結ぶこの企画。ほぼ社会芸術の構想と類似してようか。ハッハ笑えてハマり、乗い況したメンコ屋六文堂（牟田口写）、ガラス屋七輪堂（長谷川千賀子、天野彩）、竹屋のしげちゃん（川島茂雄）、あかり屋「ＡＲＩＫＡ」（田中清隆）は大暴れ。「自力更生車＋α計画」は順調を霧るがごとく。

ところがどっこい、そうは問屋は下ろさず仕舞い。メンコ屋トンズラ！まようなら。突然の出来ごとに、残った七輪堂、竹屋のしげちゃん、あかり屋「ＡＲＩＫＡ」と、加えた小劇団舞は急場仕立ての大奮闘。自力で更正には来だ先遠し、大波小波を越え行かむ。ただ、まちのハ百屋や駄菓子屋、雑貨屋が嚇かく迎えてくれたのは、ありがたや。

SMF アートのわっ！回遊美術館　　2009.11.21（土）.22（日）.23（月）　北浦和公園（埼玉県立近代美術館）- 西口銀座商店街／さいたま市

里山アート展の自力更生計画

昨年の押しかけ参加がきっかけとなり、コスモ夢舞台の主宰者の佐藤賞太郎氏が、我々を全面的に受け入れた。初出展の吉田富久一の作品を田園の中心に据え、継続出展の長谷川千賀子の彫刻、南守和佳子のインスタレーション他、牟田口男はかり２名が懸命に取り組む。それに「自力更生車＋メンコ屋六文堂」、メンコ・オリエンテーリングも加わり盛り沢山。さて、我々は頼まれた数張り企画に、如何に応えられようか。

里山アート展 2009
2009.10.10（土）-11.10（火）　コスモ夢舞台
新潟県阿賀野豊実

ルー（Ruu さ）んの白昼夢に踊る

ルー（Ruu）さんのボウシャキャラバンには二度目の参加。ボウシを冠って、ただひたすら渋谷の街を練り歩く無欲なパレード。自力更生車＋メンコ屋六文堂は車輪未修理のため本体はパーティー会場で待機。新規に加わった長谷川千賀子の七輪堂が歩くことになった。

来年にはぴりへ練り出し、無疲労を潜ろうとの怒しもある。ルー（Ruu）さんの白昼夢に、不思議にも人々は踊り奏でる。

ボウシキャラバン 地球を歩く in 渋谷 2009
2009.10.18（日）

大騒ぎして龍神祭 - 太平祈願

新潟市北区公民館（佐藤博夫館長）と実行委員会が主催する「龍神祭」に、吉田富久一の大型オブジェ「大地の鼓動」が龍神の象徴として登板。祭祀を通した神秘の祭事。日本海に沈む夕日を背に、民を集めて賑やかに且つ厳かに進行。

地域交流を目的にした銀座店やワークショップに入り混じり「自力更生車＋α」が加わる。牟田口男の「メンコ屋六文堂」の他に、和田英夫の「利両手」、長谷川千賀子の「ガラス屋七輪堂」が登場し、初期 WHYM が出揃う。

阿賀野 RIVER 龍神祭　　2009.9.20（日）　阿賀野川河川敷緑地
蒲川コミュニティ ART／新潟市

仙人の風情で踊る

滑川五郎が主宰する大谷パウハウスは根強いファンに支えられ、今でも健在。この日集まった友人たちは、彼の翼を削ぎ落とした芯に誠を見届けようとしているのだろうか。

吉田のトークの後、滑川に自力更生車に絡み踊興で踊っていただいた。一時は世界にその名を馳せた山海塾。彼はその創設メンバーであるが、今は仙人の風情で独り暮らす。

トーク・ギャザリング“吉田富久一”
2008.4.18
大谷パウハウス　宇都宮

お天気任せの青空営業

広場に乗り入れると、すぐさま子どもたちが寄ってきた。新種の引き売りが目新しかったのか、古き良き時代のメンコ遊びの今日的展開が奇抜であったのだろうか。IT 時代の今日にあっても、彼等にとってはデジタルゲームもアナログ遊びも、何れも等価なのに違いない。反応は上々。ただし難点と言えば、縫紐とお天気任せの青空営業だ。晴耕雨読でいくとしようか。

当分は、提案者の吉田と実践者の牟田口のユニットで、断続的にでも各地へ PR 展開していけそうだ。

国際アートフェス 2008 in NUMATA
2008.8.16（土）-31（日）　沼田

ひたすら愉快な昼下がり

ルー（Ruu）さんのボウシを冠って、ただひたすら渋谷の街を練り歩く。踊ってよし、はしゃいでもよし。何も考えないで 200 人以上の人たちが、ただ歩くだけの仮装パレード。走り出すと間もなく子どもが二人乗り込んで前席を陣取り、なおも行進は続く。一見ノウテンキに見えるが、実は計算し尽くされた企画。疲抜けに愉快な土曜日の昼下がり、無欲なカを教えられた一日であった。

ボウシキャラバン
地球を歩く in 渋谷
2008.10.11（土）

押しかけ参加

長谷川千賀子が参加する野外展「里山アート展」で、シンポジウムが開かれると聞きつけ、[自力更生車とメンコ屋六文堂] をトラックの荷台に積んで押しかけた。山間の迷路地の田園でも、心は晴天なり。

里山アート展 2008
コスモ夢舞台
2008.10.13（木）
新潟県阿賀野豊実

数千人集客、一日だけの祭典

多くの人たちはサイクリングがたがたやってくる。広場の一角に設けられた駐輪場にはおびただしい数の自転車が並び、数千人規模の集客がある。一日だけの祭典に、準備に気つけて前夜から野菜する人や、後片付けは降に夜更けまで酒を飲み交わす人たちがいる。実質、三日間のフェスティバルだ。

ここは牟田口男のテリトリー。友だちに惹きれる彼のもとに、ひっきりなしに人が寄ねてくる。

はらっぱ祭り　　2008.11.2（日）　武蔵野公園

白昼の合戦は混戦伯仲

５月だというのに 30℃を越える真夏日。炎天下でのフィールドはきついし、フリ？会場では品物を奪い合う主婦たちで賑わうが、子どもは興味を外しやや疎ら。それでも、健かな子どもたちに老人も加わってのメンコ大会に、対等な勝負ルールを持込むと一段と熱がこもり、白昼の合戦は混戦伯仲し延長戦にもつれ込む。来週も近郊の市民活動センター染地でイベント予定。決戦の約束を交わし、本日はこれにて終了。

多摩川住宅フリーマーケット
2009.5.10（日）
多摩川住宅／調布市染地

保育園での夏祭り

NPO 法人子育てネットが運営する ところっこ保育園は、まだ開園３年目のよちよち歩き。園児を介して園と保護者、そして地域の人たちとの交流の場として夏祭りを開くことになった。出し物のひとつとして自力更生車＋メンコ屋六文堂の出陣要請あり。傍らに、園児とともにつくったペイントオブジェの横が立つ。所沢の友人、出店久夫氏も表敬訪問にやって来た。

ところっこ夏祭り 2009
2009.7.24（金）／所沢市
企画・主催：NPO 法人子育てネット

木島平物産市とともに賑わう

調布市と姉妹地域関係の長野県の木島平には新鮮な高原野菜がいっぱい。行政ルートを活用し、商店会が地域活性化に開いたセールのオープニングに参加。調布 FM に応える牟田口ほか出店者も楽しそうだ。

今後の展開の期待を述べるすれば、遠り一重の産地と消費地の関係だけではなく、農業体験や人的、文化的交流など、さらに突っ込んだ展開が望まれよう。

多摩川住宅サマー・セール
2009.6.27（日）　多摩川住宅／調布市

メンコになったコマレンジャー

「私たちの手で出来ることから始めよう」狛江で暮らす人々の連帯感を深め、地域産業の振興や地域活性化に大きな役割を果たせる。それに子どもたちの笑顔に勝るものはないからと、張り切り切る東台美技子さは元気いっぱい。行政の補助金がカットされた後も、「金がないなら知恵を出せ。遠び心で楽しもう」と、夏まつりの準備は続けられてきた。

狛江夏まつり 2009　　2009.8.1（土）2（日）
泉龍寺、泉の森会館／狛江市　　主催：運営：狛江夏まつり 2009 実行委員会

祭りは縁起、深大寺で夕涼み

団扇片手にわかし遊び、競った遊ったは大人の遊び、それを見習う子どもたちのメンコ勝負。その傍で、お手玉、ベーゴマ、回回し、メンコづくりのワークショップに、群がる子どもたちの浴衣姿が愛らしい。古の文化に目覚めれば、直接コミュニケーションが回復し、人々の間に融和がもたらされる。怖いお話しで縮めくくられるまで、老若男女が夜のふけるのも忘れ盛り上がる。祭りは、人々と世代間を繋ぐ縁起。

じんだいフェスタ 2009「夕涼みの会」
2009.8.8（土）-9（日）　深大寺／調布市

夜空を染める大輪の華に酔う

調布花火大会「多摩川の花火」は東京地方で有数の規模で知られる。

この日、多摩川河神に在る友人に誘われメンコ屋支店を出店。裏中の入っとった戦略を改装、開閉式アクリル中蓋付き、本物の紙紙？凛りの華華版。ビールが手にメンコ勝負はマナー違反？だろうか。家庭を中央広場から夜空に咲く大輪の華を仰ぐ。

メンコ屋六文堂・調布美術研究所前支店　2009.7.5～18

調布花火大会　2009.7.18（土）
多摩川住宅／調布市

わだーる師匠との不思議な縁

和田英夫（わだーる師匠）とは、前年の豊実で出会った。驚くことに共通の友人知人がいっぱいで、今までに必ずどこかで顔を合わせていただろうが。出会とは知の存在駆識にかかわること。間もなく日比谷公園の松本楼でユニット WHYM を結成し、活動を共にすることになろうとは不思議な縁。巡り会わせの不思議。和田の地盤、新発田の夜店に誘われ飛び込り参加した。

新発田ナイトバザール（夜店）
2009.7.25（土）／新潟県新発田市

熱く濃い、楽しか８日間

メンコ屋六文堂の牟田口は、ミュージシャンの吉田ケンゴ氏企画による画廊展開でのアートマーケット「ひょうこま マーケット」に出店。メンコ販売の他、メンコ大会やメンコづくりワークショップを行う。主催者のケンゴ氏とその仲間たち、Ruu さんファミリー、はらっぱまつり関係者等々と商店街や近所の人達との交流。熱く濃い、楽しい８日間を過ごす。

ひょうこまマーケット 2009
2009.4.23（木）-4.30（木）
武蔵野画廊／小金井市

オブジェパフォーマンス？！！

宮澤泉氏により開かれたアトリエ IZUMI は、石彫の作家たちを中心に個別ゲストを提供している。

この日「つながり」をテーマにシンポジウムが開かれ、30 名ほどが小品を小屋に持えて集まり意見交換。ドイツより一時帰国した彫刻家から、ベルリンの近況が時騒談として語られ、芸術の社会性が話題となる。

自力更生車＋メンコ屋六文堂も、メンコ制作依頼とメンコオブジェ制作の協力やら PR に余念はない。

IZUMI アートミーティング 2009　　2009.4.28（火）
アトリエIZUMI/ 新田市　　企画：長谷川千賀子、宮澤泉

地域住民の文化祭

地域住民の手で、ゆっくりと時間をかけて会議を重ね準備された文化祭。公共が関わり、社会正義が厳成されるかのように見える。しかし、ボランティアという美句の下で、右顧比で至る団機世代のもてあます時間と余力の吸収は、市民の将来的不安を襲い隠し、不満のガス抜きには一時的には有効に働くが、この裏には問題を転化する国家の統治操作が匂う。だとしても、子どもたちのこの笑顔に勝るものはない。

第 13 回　ボランティアまつり染地
2009.5.17（日）　　市民活動支援センター染地／調布市
主催：社会福祉協議会　運営：ボランティアまつり染地実行委員会

眠りから覚めた龍神

メンコ大会が始まると、地下の水脈で寝ていた龍神は覚め、バーバーの天井に現れて屋の様子を伺う。子どもたちはメンコ勝負とメンコづくりに夢中で龍神に気付かず、天井より下がるその姿に各々の想いを込めメンコ船をさげていく。その晩、雨に姿を化した龍神より、翌日の大会を正確寺で開くように促される。

天は地を覆い地は天を支える。龍神は地中を通い天空へ昇り、地上に降りては山野を駆け、海をも渡る。

くるりフィールドミュージアム GW
手作り体験館　　2009.5.2（土）-3（日）
旧バーバー東平／千葉県君津市久留里

桐生産地乃店、および 調布ふろしき部による店舗展開

2002年　社会芸術展「THE 市場」

芸術の創造性とまちの創造性をむすびつけ、可動式仮設店舗や野外ステージ、大テントを登場させた。桐生からは、機屋の有志でつくるNPO桐生産地乃店による店舗展開とファッションショー。調布からは、まちなか物場活用として調布アイスクリームの提案、風呂敷部のワークショップ、ダンシャケプロダクションのダンスパフォーマンスと物販ショー、野外シアターが展開され、空地の有効利用の具体的提案がなされた。ここでは、まちの創造性と芸術の創造性を結びつける試みだ。

可動式仮設店舗

桐生産のメタリック・ケーン・クロスによる野外大テント

映画のまち調布にちなみ、ダンシャケ・プロモーションの企画で復活したインディーズ映画によるナイト・シアターを開催。最後は野外ステージとなり若手商人の舞台となる。

野外店舗前の歩道で開かれたファッションショー

社会芸術ことはじめ

「根」としての「アートの手」
根底に個人を越えた「大きな手」があり
それを「社会芸術」と考える

逆境に身を置くことで、個人を越えた根源の問題に行き当たる。

社会芸術の提案と実践は、調布と桐生の二つの小都のまちづくりの片鱗に関わったことから始まった[注1]。二つのまちを行き来し見えてきたことは、まちづくりに真剣に取り組む多くの人たちの存在だ。彼らは地域の衰退に共通した危機感を持っており、そこから如何に抜け出したらよいか、時代の逆風を乗り越えようとさまざまな取り組みに挑戦していた。夜半に開かれる会議には多くのメンバーが寄り合い、危機の因果をあぶり出し、解決の糸口を見いだそうとする創意工夫がうかがえる。まちの創造のエネルギーを痛感し、ソーシャル・キャピタルの重要性をそこで理解した。

実は私自身が失業という人生の危機に陥り、立ち位置を仕切り直す必要が二つのまちとの交流を始める切っ掛けとなっている。社会における底辺に身を置き、改めて「社会と創造性」について学び考える機会を得た思いだ。

1．社会芸術を考える

社会芸術、それは近代が導いた芸術至上主義を超え、個人を自他と入れ替え可能な相互信頼のネットワークのなかで求められる。人々が根源的な問題にたどり着いたときに、共通する目的意識が生まれ真剣に創意工夫がなされるのであり、共に生き栄えようとする創造エネルギーが「資本」であることに気づかされる。それは平安な時には見えにくく、危機的な状況においてこそ認識されやすい。

危機を呼び込んだ大きな問題が二つある。日本の近代化の根幹に組込まれた経済資本主義と民主主義のそれぞれの陰に潜む欠陥である。

ひとつ目の問題は、経済資本主義の宿命である輪転原理によって繁栄の頂点の折り返しを越え、社会の歯車が軋み始めて以来。今日ではすっかり取り返しのつかない事態に陥っているようだ。変動相場制移行（1975年）により為替レートは上がり、それまでの基幹産業であった鉄鋼、造船、炭坑、繊維の各産業が大打撃を受けた。以来、主だった生産業はレートの低い海外へ移り、国内の多くの地域産業の機能は停止した。にもかかわらず架空の成長機能は働き続け物価を上昇させ、前世紀の愚行バブル景気さえも呼び込む。

今日、経済資本主義の成長神話、このまやかしに踊らされた反省に立って、社会再生（芸術創造、まちづくり等を含む）には、資産の基準を経済とは別の価値に置き再編されるべきであるのではないだろうか。

もうひとつが、かねてより民主主義が人びとに大きな期待と希望をもたらし、我々に自己独立心を芽生えさせたことは大きな成果である。ところが、個人主義が浸透する一方で、これが経済資本の私的な利害と結びついて利己主義に差し替えられた認識を持つことが重要である。この反省に立脚し、公利的に、あるいは社会的個人主義において社会再生されるべきである。

この経済・社会の二つの問題は生活文化全般を支配し、我々の関わる芸術にも多大な影響を与えている。

自己表現ー個性ーオリジナル、これらは前世紀には日用会話に登場する一般概念にまで広まっていたが、利益偏重と利己主義の正当性を裏付けていると言えまいか。利己的な意味での自由に陥った芸術は自己消化（自己満足）されるべきことで、社会に受け入れられる余地がない。社会に理解されないという愚痴や認められたいという欲求は愚の骨頂、自らが社会と断絶し閉塞芸術に落ちた証明である。

この認識に至り、芸術活動を進めていく最中での失職があり、これが一旦芸術から離れ、まちづくりとの出会う好機となった。

以来、利己主義を基準にする近代芸術と決別し、自然の創造を基準に芸術の創造性をもって物事を考え行動する社会の再構成に挑戦することになる。

2．社会芸術の活動ー自力更生車以前

「社会芸術展 THE 市場」の実践（2002年3月2日～4月28日）

折しも、調布仙川のプラザ・ギャラリー（伊藤容子）より広大な駐車場での野外個展の依頼が舞い込む。ここに従来の個展形式とは異なるテーマ企画「芸術の創造性とまちの創造性をむすぶ」を提案、まちづくりと芸術創造とを一致させる試みが受入れられた。

駐車場跡の広場には可動式仮設店舗の他に、ラメ生地に織われた出店用大型テント、大型スクリーンを兼ね備えた野外ステージを設置。調布の若手商人塾と桐生産地乃店の参加協力を得て二ヶ月にわたる「社会芸術展 THE 市場」は組まれた。

桐生産地乃店の小林宏光の発案で全国の若手デザイナー有志に参加を仰ぎ、ハンドメイド衣服や桐生産の生地等の売り場を設定。さらに、神山二美を中心に野外ファッションショーが開催される。狙いは、変動相場制移行以来、斜陽となり崩落した繊維産地、桐生に残された技術力を活かし小ロット受注生産に切り替え、若いデザイナーの注文にあわせ提供する試みにある。

若手商人塾関係では、一時は調布アイスクリームのブランド化計画を軸に動いたが適わず、実際にはふろしき文化の再生を訴えるふろしき隊（石川邦子、他）が参加。山下勝則が率いるダンシャク・プロモーションによるダンスや芸能ショー、野外ナイトシアターが開催された。特に会期を通して参加したクラウン*ミーナや芸人らんまるとその仲間達が、毎回新作づくりに挑戦、場の盛り上げに貢献している。これに公募された幾つかの出展参加があり、まちなかの空地を有効利用する提案がなされた。

例年になく連日の強風が吹き荒れた春、風圧で倒壊したステージの修理を繰り返し、販促ポスティングや音響を伴うことで一部の住民から批判も受けたが、大方好評であった。二ヶ月間の運営には想像にし難い忍耐、工夫と努力、それに誠意を必要とした。それでも同志たちー若手商人塾や桐生産地乃店、他の面々の献身的な協力に支えられ、会期を乗り切ることができた。

尚、アーティスト・イン・レジデンス機能を持つ画廊に頼るところは大きい。

オープンカフェ in 池袋 2004.～'05

池袋でのまちなかアートワーク構想は、上門周二の招きで90年代中旬から何度か現地視察や講演等を重ねてきた実績があり、世紀を超え忘れかけた頃に再興した感がある。

オープンカフェでのまちづくり活動は（財）豊島未来文化財団を中心に幾つかの池袋のまちづくり団体や商店会が連合して、東口グリーン大通りの有効活用に動いていた。その将来的構想のひとつとして大通りにLRT（Light Rail Transit= 軽量軌道交通）を走らせ都営荒川線と池袋駅を結ぶアクセスと環境保全とを配慮し、まちに豊かな賑わいを創出する狙いがある。

この通りはその名のごとく、広い歩道に植えられた樹木が成長し都会の中の森が連想させられる。人の波で賑わうサンシャイン通りと対照的に、幅員が広いにも関わらず金融機関が立ち並び商業施設は少なく人通りが疎らである。通りを丸ごとアートの舞台に使い潜在的魅力を引き出し、未活用の資産の有効利用を考える切っ掛けにオープンカフェは企画された。

'04は国土交通省の助成を受け勢いづいた。美術関係では村上九十九の協力を得て巨大な椅子の彫刻「神々の座」と吉田の「大地の鼓動」で構成し、通りの数カ所では野外音楽会が催された（11月4日～7日）。

'05は主催が池袋東口美観商店会の一団体に縮小し実行され、美術は吉田が一人で担当し、音楽会も一ヶ所となっている（11月3日～5日）。

まちづくり団体主導による文化イベントには、文化が供え物のように取り扱われる感も否めないが、芸術家が見過ごしてしまう重要なことが提示されてもいる。将来構想がそれである。「まちづくりの活動は誰のためにあるのか、何処へ向かうべきか、そのためにはどうしたらよいのだろうか」と考えて企画し行動をとる。このことは本来、芸術活動にも備わっていたことだが、近代化の過程で社会との関係が遮断され、私的に内向した個人の自由にすり替えられ、重要なことが忘れ去られてしまっているようだ。

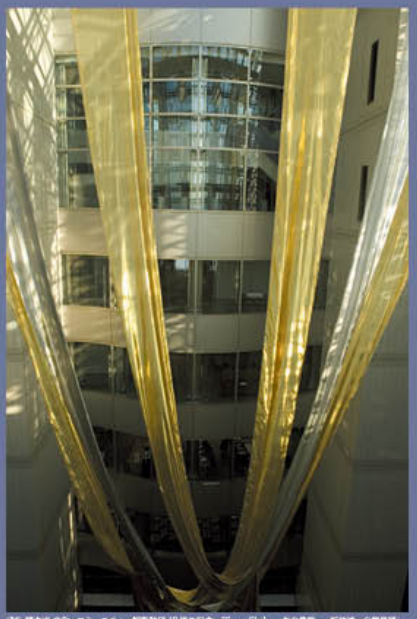
根源にある問題は、芸術もまちづくりと同じではないだろうか。苦境に立たされた立場で物事を考えられるならば、芸術家よりも市民の方がよほど創造的である。

その後、企画に携わった「Cross-Cloth　新井淳一の世界展」（2006年1月7日～2月12日）においても、市民が創造性の醸成を目的に発起された[注2]。

自力更生車計画の模索

自力更生車の計画は2006年より始まる。構想を煮詰めていくには、鍵の役割を果たす対象が必要不可欠である。そこで、まちづくり関係のコンペの幾つかへ応募。しかし、なかなか受け入れられることは無かった。そのような最中、角度を変えて望んだのが神戸ビエンナーレ2007。ウェブ社会における信頼関係にフォーカスした作品の制作を試みる。

オープンカフェ in 池袋 2004.～'05は、池袋駅東口にのびるグリーン大通りの有効活用をねらい、まちづくりの地域活動として企画された。補助得に「大地の鼓動」が設置され、通りを華やかにマーキングした。



（財）調布市 文化・コミュニティー振興財団 10周年記念 「Cross-Cloth ～布の世界～ 新井淳一の世界展」
2006年1月7日～2月12日 調布市文化会館たづくり 「自然界織物集」 コーディネーター：吉田重久一

神戸ビエンナーレ 2007　2007年10月4日～11月25日　神戸メリケンパーク　"ECHO BOX"　社会芸術／吉田重久一

国際アートフェス 2008 in NUMATA

師の眼を養った近代芸術家と意識都市の民はともに社会的に障害者である。

違えが持ち合わせる種々ばかりの力を出し合い、新造性を共有することで、経済発展に行き詰まった資本主義の障害さえも乗り越えられないだろうか。

我々は独占と閉鎖を破壊し、共に分かち合う社会的機構者へと脱皮すべきだ。

左：作業場を見学し、巨樹師を中心者で活躍した「自力更生車＋メンコ屋六文堂」
奥の中に見る小武神二の作品が展示される

上：リュウ2によるパフォーマンス セッション

左：ちーむ夢人間により現地制作された大きな絵画は、有新地のポケットパークにテント絵画として設置

下：新潟市被村浜で制作中のちーむ夢人間のメンバー

企画担当者のひとり長谷川千賀子は地域の文化人と無機的に交流。東京から沼田への訪問を繰り返し、金井竹徳の「利根沼田古書市展」参加をとりつけ、氏による地域を語るトークショーが開催される。

大谷俊一の復刻した沼田古写真の前で熱弁を振るう金井竹徳

やまだや書店での長谷川千賀子の展示（台東区金井徳氏より提供）

阿賀野川を背にした「大地の鼓動」　「阿賀野 RIVER 龍神祭 2009」にて

「神戸ビエンナーレ 2007」での実践（2007年10月6日～11月25日）

本展がコンテナ内のみに限定されており、自力更生車での展開は一時中断せざるを得ず、別の切り込みで社会芸術展開を試みる。

ここでは、阪神淡路大震災をヒントにした。コンテナの閉塞空間の中で、観客の歩行が床の踏み込みで起きる揺れと、それに伴う音響の発生装置「ECHO BOX」を制作し、これを監視カメラで捉え Web 公開した。現場体験者が帰宅後に Web アクセスしモニターの前で目にするのは、現場で蠢く他人の様子。ようやく己が誰かに見られていたことに気付くが、己を見ることはできない。闇の中での不安とは別に、現場とモニターの間を繋ぐメディアに、さらなる不安がつのる仕組み。メディアの仮想が、現場での実体験とモニターでの疑似体験の間で起きるズレ。および、二つの体験の相乗に期待し、現場への観客の誘導を試みた。しかし、相乗させるにはもうひとつのステップ、口コミでの噂の伝播、報道等のメディアの力を借りねば成り立たない。

見えにくい関係を見えるように構築することを創造しているのに、現場作業で精一杯で手が届かぬのでは不足の業。Web 装置のシステム構築は完了していたのだが。結果は、現場は遊具と化し、Web 番号がチラシに表記されていても気付く人は少なく、会場にて口頭で伝えるもアクセスは稀であった。

最大の成果があったとすれば、装置づくりの協力者の高綱亮介の他に、現場にて Web 協力した佐藤新吾とカメラマンの下鳥達也とともに、連日の限界を超えた徹夜の作業を共にしたこと。そして、現地ボランティアの人たちの協力や会場での人々との出会の方にあった。彼等と共有した体験が信頼の環を拓いたとすれば、多少の成果はあったとしよう。

重要なことは、Web の構築や装置のシステムの機能だけではなく、より強い人間関係が作用することだ。報道の力を借りるとしても同じことが言えよう。このこと自体が、社会芸術が求めようとした目標であったが。半ばしか届かない現実を認めた敗北感と同等に、限界に挑戦した充実に希望を覚えた。

この苦渋の後、すでに設計図であった自力更生車は形を成しており、押し車でしかないそれに起動の概念と再生への構図が見えてきた。

3．自力更生車＋メンコ屋六文堂の誕生　以降

国際アートフェス 2008 in NUMATA（2008年8月16日～31日）

おりしも、沼田でのアートフェスティバルの企画の話しが舞い込んできた。安福信二の推薦で、美術部門の企画を長谷川千賀子と吉田で手伝うことになる [註3]。このとき、自力更生車の運用の提案に対して、メンコを扱う牟田口努の推薦を受け、営業品目が決定。ユニット「自力更生車＋メンコ屋六文堂」の誕生である。いよいよ具体的な活動が始動する。

2008 年 8 月のこのアートフェスより 2009 年 11 月までの約一年半の間、ユニット「自力更生車＋メンコ屋六文堂」はおよそ 30 カ所という多数のアート展や地域イベントに参加した。（「自力更生車」の活動記録参照 p.9）

ユニットと言う形式での活動は相乗効果を生み出す。牟田口はすぐさま自力更生車に載せるメンコショップ用トランクケースの制作に着手すると同時に、メンコ制作の協力を知り合いの作家に依頼し始める。出だしは収集されたメンコと、行く先々にちなんで制作したメンコの販売から始まり、間もなくメンコ大会へと発展。吉田はメンコづくりワークショップでこれに応じた。

つまり、吉田はメンコ屋を応援し、牟田口は自力更生車を活用することで、社会芸術の活動に協力する相互扶助の関係である。

このユニットは、小さなポップアートであるメンコ絵とともに、メンコ大会やワークショップをしながら人々とコミュニケーションを交わし、メンコを販売。賛同者との出会によって、さらに新しいメンコが収集され、広がっていく。また、行く先々の土地にまつわるメンコをもって旅することで、街と街を繋いでいく、ささやかながらの社会機能を持つ。根源から出発する社会芸術に相応しいシステムが構築できてきたように思われた。

また、同イベントでは、現代美術家の近況とシャッターを下ろし抜け歯のようにポケットパークの点在した地方都市を社会的破綻に近い存在として捉え、障害者グループを交え、全員が同じ舞台で活動することで芸術の根源を考える試みをひとつの特徴とた。先行活動として群馬のアート ユニット・リュウ 2（小柏龍太郎＋前島芳隆）があり、東京からちーむ夢人間が加わった。

WHYM 結成（2008年12月9日）

長谷川より、自力更生車でのこれからの活動に先駆けた WHYM なる新ユニットの提案がなされ、日比谷松本楼に（W）和田英夫、（H）長谷川千賀子、（Y）吉田富久一、（M）牟田口努が集まった。

この提案には、社会芸術の理念をもとに［自力更生車＋メンコ屋六文堂］を強化し円滑に機能させるとともに、さまざまな参加者との組み合わせの可能性に挑戦する組み替えユニットの構想である。メンコ展開の他、新企画を持って全国（海外を含め）至る所への出没を推進していく考えであった。つまり、自力更生車＋メンコ屋六文堂を切っ掛けに、自力更生車の展開を拡げようとした社会芸術の意図としめやかに一致していたと思う。

考え方の根拠は、安福・長谷川・吉田で協力して企画した沼田でのアートフェスにおいて長谷川が著した企画文、プラティカル・アートの概念から読み取れる [註4]。

阿賀野 RIVER 龍神祭 2009（2009年9月20日）

龍神祭からは長谷川千賀子「七輪堂」が自力更生車の活動に合流した。手はじめにガラスワークショップを開始する。

七輪堂は「台所が創造の原点」と考える長谷川の発想をもとに吉田が制作を担当した。釜戸を殺けた移動するダイニング・キッチンと見ることができる。龍神祭では既成の七輪を活用したが、その後改良を重ね、特設の窯を取り付け完成させている。

主婦の創作の原点が台所にあるなら、万華鏡、ガラス細工、陶芸、鋳造、、、。火と水と土の他に焼芋、パン焼、煮物、何でも登場する。家事にまつわる創作は発想が豊かで、想像するも楽しくなる。（佐藤晴夫「生活レベルからの芸術の社会貢献」の項参照 p.13）

これに引き続いて、コスモ夢舞台なる理想郷を標榜する佐藤賢太郎が企画主宰する「里山アート展」（2009年10月10日～11月10日）[註5] へも、前年の 2008 年より自力更生車を持ち込むが、デモ的導入に留まっている [註6]。

アートのわ！回遊美術館（2009年11月21日～23日）

埼玉浦和の回遊美術館には、牟田口努「六文堂」と長谷川千賀子「七輪堂」に加えて、川島茂雄が「竹屋のしげちゃん」、田中清隆が「あかりやありか」で新規合流。これらを天野彩、小船正博が協力に入り支える。

埼玉県立近代美術館のある北浦和公園を中心に北口南商店街と浦和駅を結ぶデルタ地帯に、自力更生車は迎え入れられる。移動屋台の活動に丁度よいスケール感。朝、美術館駐車場を出発し、駅北口を回遊してからそれぞれの定位置に着き営業を開始。程よく狭い街路ではポケットパークで、公園では芝地の上で展開する。

ところが、強い方に人が寄るのは世の常なり。アート緑日とあって人の流れは美術館の方に方より、商店街にはあまり回遊せず。移動の煩わしさもあってかチーム内部から異議が出る始末。

社会芸術の主張を通すならば、人出が少なく売上げが期待できなくとも、自力更生車の機動性を生かし、商店街へ前日全出動すべきだったかと反省する。誤算を後悔するも先に立たず。（「回遊美術館」については中村誠の項参照 p.12）

ところで、回遊美術館を最後に風来坊よろしく牟田口は突然ユニットを解消、自力更生車とのチーム活動を離れてしまう。WHYM 構想を半ば崩しながら宇都宮での展開へ立ち向かうことになる。

社会芸術　吉田 富久一

註

(1)　調布では 2000 年秋の第一回まちなかアート展へ島田昭仁の推薦で招待を受けたことを切っ掛けに、若手商人塾（塾頭、山口昌之）の活動に、吉田はオブザーバーメンバーとして参加するようになる。旧甲州街道沿いの活性化の月例勉強会やイベントに参加する中で、特にまち中に残された牧場の牛乳を使用する調布アイスクリームのブランド化に向ける研究に注目する。

平行して桐生においては、島田とともに本町六丁目の事務所「まちびと処」を根城にパワー of 桐生、NPO 桐生産地乃店（代表：小林宏光）、JUNICHI-ARAI、デザイナー集団 FT.E、等と接触。1975 年以降、基幹産業から外れた繊維生産地の再生へ向けた地域行動に触れた。特に桐生産地乃店の提唱するデザイナー対応の小ロット生地生産構想に注目、しばしば行動を共にする。まちびと処の企画で調布と桐生の交流が始められた。

また、桐生市内の空地駐車場の有効活用として可動式仮設店舗を開発。デザイン・制作を吉田が、営業・渉外を島田が担当。さまざまなイベントに活用できるツールとして桐生市へ提案するが、反応はおぼつかなかった。概念とマケットだけでの打診ではなく、もっと具体的な展開を示す必要があるものの、桐生でその機会を得る前に、次に展開のステージをプラザ・ギャラリーへ移し、具体化することになる。

(2)　「Cross-Cloth　新井淳一の世界展」（2006年1月7日-2月12日）コーディネート

この展覧会は調布市文化会館たづくり、及び（財）調布市文化コミュニティー振興財団 10 周年記念事業として企画される。実は本件は市民 5 人による財団運営委員が提案した 5 企画の中のひとつである。その委員（山口昌之）が、かねてより以下の事柄に同調し、新井淳一と親交のある吉田（社会芸術）に実行を要請。財団が敬名の紹介者の中からコーディネーターを選出、追認し実行に移された。したがって、文化会館での展覧会の他に、甲州街道沿い商店街の数カ所でも平行して新井淳一にちなんだ企画が組まれている（まちなか担当：島田昭仁）。官民協働のまちづくり文化・経済イベントである。

「新井淳一（1932 ―）は、桐生に生まれ育った機屋の御曹司。若い頃より新素材による繊維開発に勤しみ、プラスチックフィルムのマイクロフィルムヤーンの製糸加工を中心に数々の特許を取得し、すでに 1960 年には化学繊維グランドフェアで通産大臣賞を授かっている。近年はステンレス繊維や難燃繊維の開発を手掛けている。

新井は 70 年代に入る頃、三宅一生や山本寛斎、川久保玲に開発した素材を提供。彼等がパリコレ等で注目を浴び報道に大きく取りざたされる中であっても、技術屋は世の裏に隠れ目立たないものだ。

折しも 1973 年にオイルショックで経済成長は行き詰まり、1976 年の変動相場制への移行で国内基幹産業は壊滅状況に陥る。全国の繊維産業や鉄鋼・造船業が大打撃を受け、桐生の機屋も次々に閉じていく。そのような状況の中でのファッションデザイナーたちの躍進は、日本経済界に一筋の光明と期待された。

だが、やがて変化の兆しが見え始める。パリでの評価基準が、デザイナーはアレンジャーにしかあらず、素材開発者がクリエイターとして高く評価される。国内評価と逆転した国際評価によって価値評価の逆輸入の典型である。これを追認するように 1983 年、文化・産業への貢献を顕彰のために特設された第一回毎日ファッションデザイン賞で、三宅の大賞とともに特別賞が新井に授与される。」

このことを念頭に、低迷する日本経済と、やはり低迷する調布の活気の再興を考えるカンフル材にしようとこの展覧会は企画された。

ここでも、創造的発想が市民から起こる実例を確認されたい。この企画が市民の献身的な協力なしでは成り立たなかったのは確かである。幾つかのワークショップは盛況であったし、大インスタレーションも実現できた。また、DVD での記録集も残され、市内には新井淳一の品物を扱うようになった店もある。

しかし、創造的発想による創造的出来ごとをモチーフにした企画展であったにもかかわらず、このイベントを起爆にした決定的手法は未だ踏み出されてはいない。但し、数年後に完成を控える京王線立体交差の地上部空地の有効利用に併せて、調布システムを完成させたい意向がある。尚、不肖にも、新井淳一は評価の高揚にもかかわらず、彼自体が日本の経済状況と符合している現実も見逃せない。

(3)　国際アートフェス 2008 in NUMATA（2008年8月16日～31日）

井上紗弥が群馬県沼田市郊外に廃屋を改装しダンススタジオ＊オンパロス＊を開設。東京と沼田を結ぶ芸術文化活動展開を目指し、2007 年より NPO 法人設立に向けはじめたアートフェスティバル。2007 年は「南郷小学校の夏」と題して郊外の過疎地の小学校を会場に準備イベントを開催。吉田は招待を受け出展。翌 2008 年の本展が NPO 取得後の第一回に位置づけられた。

長谷川は小宮伸二、安部太雄、大谷俊一を推薦するとともに、自らもやまだや書店内の画廊での個展で参加。吉田は加藤アキラ、前島芳隆と小柏龍太郎のユニット＊リュウ 2＊を推薦し、＊ちーむ夢人間＊とともに参加する。この際に牟田口努の紹介があり自力更生車でのユニットが成立。さらに小船正博が自薦で参入した。他方、主催者側から三枝泰之、保住将文、スサナ・カステジャーノス、ゴヤ・フォリオ・エドワルド、木下進、浅沼知明が合流。街地ではやまだや書店の他、ポケットパーク（3）と空き店舗（3）、夢蔵、公民館が充てられた他、オンパロス庭とその周辺の畑と竹藪では、安部と加藤等により野外展開された。

多くの会場が展示専用会場ではなく、必然的に商店会や市役所はじめまちの住民との交渉が必要となる。小宮は桑原毛糸店、大谷は目抜き街地に残された写真を扱い、リュウ 2 とちーむ夢人間、自力更生車＋メンコ屋六文堂は西田建材店と交渉に入る。特に長谷川は地域の文化人と積極的に交流、訪問を繰り返し、金井竹徳の「利根沼田古書市展」での参加をとりつけ、地域を語るトークショーが開催された。

(4)　この文を元にコンセプトを作成すれば、以下のようになろうか。

- ライヴな出会い - プラクティカル・アート

グローバリゼーションが進行したといわれる今日において、世界を単純化しようとするグローバルな考え方と、地域の特色や特性を考慮するローカルな考え方を融合したグローカルな文化活動が今まさにもとめられているのではないでしょうか。私たちは［出会い］こそが、世界と地域を重ね、生きている―今があるという瞬間を与えてくれると考えます。

「ライヴな出会い」による有用性のある芸術活動（プラクティカル・アート）が、そして地域の豊かな文化のなかに根を張ろうというこころみが、生きているという実感の種をこころにおとしてくれることを願います。私たちはプラクティカル・アートを媒介にした出会いが、人々のさまざまな垣根や障害を越え、元来の素朴な人間としてのコミュニケーション［対話と参加］を実現すると信じます。

(5)　「ソーシャル・キャピタル　地球主義による夢の実現」 吉田富久一 「里山アート展 2009」 コスモ夢舞台ブログ　2010 年

(6)　「里山アート展」については、「コスモ夢舞台 2009 Vol.2」、「コスモ夢舞台 2010 Vol.3」を参照のこと。

2011 年の今、この「里山アート展」と「阿賀野 RIVER 龍神祭」の阿賀野川流域の二つに参加を通し、川越での展開「蔵づくり空間と現代美術との出会い」等を含めて、社会芸術のあらたなテーマが浮き彫りにされ「龍神プロジェクト 2011」として本腰を入れることになる。その取り組みは次号「社会芸術 Vol.2」で述べることにする（予告 p.29）。

陶芸ワークショップ（左）とドラムカン窯（中）2010.8.18 アトリエ泉　　仙川アートフェア（右）2010.11.6 プラザ・ギャラリー

アートプロジェクトの展開における社会芸術の有意性

本田 悟郎（宇都宮大学講師）

モダニズムの芸術が自らの純化を進め、ミニマルな表現とともに芸術の自律性を獲得した後、1970 年代には、画廊や美術館などホワイトキューヴのニュートラルな空間を批判して広大な自然を新たなフィールドに選んだアースワークの展開があった。そして、それらの作品は「プロジェクト」と題されもした。しかし、このように、モダニズムの作品概念と美術の制度に向き合い、モダニズムの文脈に沿って、言わば自己解決をはかることから生成された作品と 2010 年代の日本におけるアートプロジェクトとでは屋外にも展開するという表面的な共通性こそあれ、その意味においては、大きな違いが浮かび上がるであろう。

2010 年 4 月「社会芸術 自力更生車＋α計画 2010 IN 宇都宮」が開催された。これは、栃木県宇都宮市内の画廊ギャラリー・イン・ザ・ブルーを主会場に、その近隣と少し離れた市内中心街のオリオン通り商店街で展開された企画である。企画者は美術家の吉田富久一（1953 ー）で、この企画を構成する 10 数名の作家の一人でもある。美術大学で油画を学び団体展や美術館企画展などで作品発表を重ねた後、油画の制作発表からは離れ、2000 年代には自らの社会芸術の理念のもとに新たに継続的な活動を展開するに至った。吉田富久一は自身が提唱する社会芸術について、「芸術の創造性と社会の創造性を結び付ける活動」[1] と述べている。本稿では、この社会芸術の理念をもとに宇都宮での企画について述べる。また、そのあり方を捉えるため、アートプロジェクトの文脈において、この活動を論じることとしたい。

日本におけるアートプロジェクトの起こりは、1990 年代半ばに「灰塚アースワークプロジェクト」[2]「時の蘇生、柿の木プロジェクト」[3]「緑の森の一角猷座」[4] などで、今日へとつながる初期の重要な動向が展開されたことにある。これらの動向は、アートを通して、歴史ないしは地域に横たわる問題を、見る者や参加者へひそやかに語りかけ、社会の表舞台へと浮かび上がらせるものであった。地域の課題や地域性と向き合うという観点は、今日の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」[5] のような大規模なプロジェクトにおいても共通するように、概ねアートプロジェクトとは、芸術作品の生成とその受容において社会的な場が関与するという点に、まず、ひとつ、その特性を捉えることができよう。そして、芸術と地域との結びつきが重視されるなかで、次に、芸術と人との関わりからも新たな価値が創出される特性を持った活動であると言える。プロジェクトの場において制作のプロセスとともに作品が提示され、日常の中に芸術上の非日常が付加されることで、地域の歴史や社会問題までもが作品の主題を構成する要素となる。ここで、作品を享受する者は、新たに作品への参加者と成り、美術家とともに作品の生成とコミュニティの創造に加わることとなる。ここに、吉田富久一の社会芸術とアートプロジェクトとの共通性を捉えることができるにしても、社会芸術の活動には、これらとは異なる独自性があることにも言及しなければならない。それは、現代美術のひとつの志向であり、今日の社会における美術の可能性でもある。

この企画には、吉田富久一の≪自力更生車≫をはじめ、安部大雅≪ Pizza Mobile ≫、長谷川千賀子≪七輪堂≫、加藤アキラの≪でまえギャラリー≫、小船正博の自転車による作品など、移動可能な作品が含まれていた。吉田の作品はオリオン通りに移動後、人々が参加するワークショップの創作の場そのものとなり、また、長谷川の作品は大型の万華鏡であり、参加者の目と周囲の風景を繋げる装置であった。ともに作品それ自体が、人々の参加を意図したものであった。安部も同様に普段の彫刻制作からは離れ、この企画においては、実際に参加者が自らつくり味わうためのピザ屋台を作品化している。これら、移動可能な言わば動産美術としての作品は、物理的な移動だけでなく、人々の創造性に働きかけるという意味での動的な要素を有していた。画廊でのワークショップにおいても、衛守和佳子は参加者の手形をつけた素焼プレートを企画し、渡辺恵美子は原毛を素材に制作した参加者の作品を美術家たちの作品とともに、その場に展示した。これらの活動は、アートプロジェクトにみられる人々の参加の概念と重なるものである。

では、この社会芸術の活動は、アートプロジェクトに見られるもうひとつの特性と、どのように比較できるのであろうか。多くのアートプロジェクトは、はじめに特定の場、コミュニティありきで展開され、アートに付随した地道な活動が行われ、地域の現実的な課題に向き合う契機としてアートを位置づけている。これに対し、この社会芸術においては、参加者がアートを介して思考するのではなく、あくまでも創造するのである。コンセプトとして掲げられた「芸術による社会貢献」とはあくまでも目的ないしはプロジェクトを行った上での結果なのである。参加者は活動のプロセスに加わることで、日常の中で創造的な経験をする。社会芸術ではまず第一にこの創造性に主眼が置かれているのである。多くのアートプロジェクトに見られる地域性に積極的な関与をする取り組みは人々との関わりを充実される手法として高く評価されるにせよ、それらと社会芸術との違いは、より、社会芸術では美術本来の特性としての創造性が肯定されていることにその独自性を認められるのである。それは今日の他のアートプロジェクトとの差異であるばかりか、モダニズムの文脈においてアースワークが外部に新たな価値を見出したこととも異なる。2000 年代初頭から 2010 年代における吉田富久一の社会芸術は、あくまでもアートに本来備わっている創造性に強く働きかけようとするもので、ここに美術の社会的な可能性も創出され得るのである。さまざまなアートプロジェクトとの違いは、着眼点と手順の違いでこそあるが、それは決して小さな差異とは言えない。先述のとおり、社会芸術とは、「芸術の創造性と社会の創造性を結び付ける活動」である。その理念は美術家と参加者だけでなく、さらには、社会の創造性をも肯定的に捉える理念である。社会芸術は、人間と作品と社会、全ての存在の創造性を発露させることで、美術の可能性を社会的に現出させる活動と言えよう。

かつて、20 世紀を代表する思想家の一人、アメリカのジョン・デューイ (John Dewey/1859 ー 1952) は、芸術が日常と遊離する現状を危惧し、次のように述べた。

「芸術はコミュニケイトする観衆をつくりだす。障壁だらけの世界にあって、芸術は遮る物のない人と人との間の完全なメディアである。」[6]

これは芸術活動の基盤に人々の日常の経験が深く関与することを述べた言説である。芸術の創造性は、日常の事柄を深い水準で意識化させることで、人々に経験をもたらすのである。そして、このような芸術の創造性こそが、現実的な社会問題へと向きあう糸口になり得るのかもしれない。

附記　文中の敬称は省略した。

註

(1)「社会芸術 自力更生車＋α計画マニフェスト」吉田富久一、2007

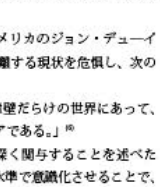
(2) 美術家、岡崎乾二郎を中心に、1994 年から活動が開始された。ダム水没地再辺住民らとともに、自然と文化の調和を意図した「環境美術館」を構想。

(3) 美術家、宮島達男により、1995 年に開始された。被爆した柿の木の二世苗木を参同者とともに育てるプロジェクト。

(4) 彫刻家、若林奮により、1996 年に、東京都目の出町の廃棄物最終処分場予定地の森に、椅子と机の彫刻作品を制作。

(5) アートプロデューサー北川フラムの企画により、2000 年から 3 年に 1 回開催される芸術祭。新潟県越後妻有で地域性と参加を意図した大規模なアートプロジェクト。

(6)Dewey,John. Art as Experience,op.cit. P105



オリオンスクエアにて

手押し車で「芸術」販売

県内外作家11人が参加

宇都宮歩き創作体験共有

2010（平成22年）4月17日（土）下野新聞

SMF アートのわっ！「回遊美術館」と「自力更生車」のこと

中村 誠（埼玉県立近代美術館主席学芸主幹・SMF 事務局）

「自力更生車」という不思議な名前の屋台を引いて活動する面白いアーティストがいると聞いたのは、2009 年の夏のことだった。《自力更生車＋メンコ屋六文堂》の資料を拝見して、ちょうどそのころ準備を進めていた「回遊美術館」というプログラムにぴったりだと思い、参加協力を依頼した。

今回は「自力更生車」の吉田富久一、「メンコ屋六文堂」の牟田口努に加えて、ガラス工芸「七輪堂」の長谷川千賀子、「竹屋のしげちゃん」こと川島茂雄、「あかりやありか」の田中清隆が新たに参加し、《自力更生車＋α計画》と名付け、拡張してプロジェクトを展開することになった。

ところで「回遊美術館」というのは文化庁のモデル事業として 2009 年に実施した「SMF アートのわっ！　あつまれアートのつむじ風」の一環として実施されたプログラムで、埼玉県立近代美術館のある北浦和公園、北浦和駅西口駅前、北浦和西口銀座商店街を結び、公園やまち、商店街を回遊しながらさまざまなアートを楽しんでもらおうというものだ。

前年度に不思議美術家・松本秋則の竹のサウンドオブジェを北浦和西口銀座商店街の店舗内や街路に 40 点ほど設置して、商店街を歩きながらアート散歩を楽しんでもらうプログラムを実施して好評を博しており、その延長線上に、7 組のアーティストに公園・商店街・駅前を結んでアートを仕掛けてもらい、美術館とまちをアートで結ぶ試みを、さらに展開させようという企画であった。

この地元の旧い商店街はアーケードこそないものの、車両の進入を止めて歩行者天国ふうに気ままに歩ける通りで、お休み処風のベンチがあちこちにあり、街角には彫刻が置かれていたり、月一度フリマが開かれたり、結構、懐かしいいい雰囲気の商店街だ。しかしスーパーが廃業してマンションに変わったり、跡継ぎがおらず老夫婦で何とか店を賄っていたりと、あちこちの駅前商店街と同様の問題が起き、少しずつシャッターを下ろす店が増えてきている。アートで賑わいができることで、美術館に来館するお客さんが少しでも商店街にも回ってくれたらというのは、商店街の方々の率直な希望でもある。

11 月 21 日～ 23 日、晩秋の 3 日間、公園（美術館）とまちを結んで「回遊美術館」が開催された。登場していただいたアーティスト・作品は、古川勝紀《ピカソー七つの謎めぐり》、出店久夫《アリアドネは夢を見る》、河村陽介＋三友周太《音の伝搬ー音の箱・光の箱》、中津川浩章と工房集の仲間たち《みんなのドリーミング・ボックス》（以上 4 組は商店街に作品を設置）、松本秋則《風を聴く》、小野養豚ん《暖》（以上 2 組は公園に作品設置）、吉田富久一チーム《自力更生車＋α計画》（公園・駅前・商店街を巡回）の 7 組だ。「NHK いっと 6 けん」で紹介されたこともあり、前年度以上に多くの人が足を運んでくれた。（詳細は SMF のホームページ http://www.artplatform.jp 所収の「回遊美術館」リーフレットおよび記録集『風の行方』pp.10-11 を参照）店舗内に設置した作品を慈しんで熱心に解説してくれた青果店の女将。「作品のおかげでお客さんと思わぬ話で盛り上がった」とか「3 日間しかやらないの？」との惜しむ声の店主たちなど、商店街の方々もたいへん好意的だった。

しかし、この 3 日間を「アートのわっ！」の中核プログラムである「アート緑日」の集中開催期間と位置付け、《アート楽市》（アートのフリマ）や《アート・パンチ》（音楽・パフォーマンスなどの野外劇場）、《ワークショップコレクション》（野外を中心に連日のワークショップ）、《空間音響ライブ》（現代音楽のコンサートとシンポジウム）、《ラウンドテーブル》（アート関係者の交流・意見交換会）、《風の娘たち》（4000 本の風車がインスタレーションと創作ダンスのコラボレーション）など、多彩なプログラムを公園や美術館内で行ったため、その運営に追われて事務局の余力がなく、美術館や公園に来られた多くの方々に、商店街にも足を運んでもらうよう働きかけることが十分できなかったのは、大きな反省点だ。マップやインフォメーションの徹底、要所要所にポイントになる作品や掲示を置く、ガイドツアーを質量とも充実させるなど、今後の重要な課題である。

企画サイドとしては、展示スペースの提供や広報面の協力という前年度の段階から、作品プランの説明会や打合せへの参画を含めて、商店街の方々により主体的にプロジェクトに関わってもらうことを期待したが、9 月初旬の事業内定から開催までの時間が極めて限られていたこともあり、この点では十分な展開ができなかった。旅芸人、アートサーカスとして一陣の新たな風を送るのか、伴走者・共存者として時間を積み重ねていくのか、いずれにせよまちや地域との関係づくりにはさまざまなステップと熟成の時間が必要だ。

さて吉田富久一の《自力更生車》には、彼の提唱する「社会芸術」としての側面など、さまざまな面がある。社会的弱者やそれを生み出す社会的状況に向けられた視線という観点に立てば、クシュトフ・ウディチコのホームレスのための簡易シェルター《ホームレス・ヴィークル・プロジェクト》1987-89 や、武盾一郎らの《新宿区段ボール・ハウス絵画》1995-98 などとも連関を持つとも思われるが、このような問題に焦点を当て喚起するための表現行為ということでは必ずしもないようだ。メンコ屋、ガラス屋、竹屋など、それぞれのアーティストの行商（実演・ワークショップ・販売）の形態に即して荷車をデザインし改良を加えて創られる《自力更生車》は、可動的であると同時にヒューマンで可塑的でもある。言うまでもないが、ここで目的とされるのは利潤の追求や経済的価値の最大化ではなく、芸術の創造性と社会の創造性を寄り添わせる象徴的な行為であり、そのためのステージ作りなのだ。《自力更生車》は、さまざまなアーティストと吉田のコラボレーションによって実現するものであり、同時にさまざまなアートフェスタやプロジェクトの出し物としても機能する複合的な作品でもある。近年では建築家やアーティストのユニットが、イベントやフェスタに合わせてユニークなステージや屋台を設計することもさほど珍しくはないが、一回限りのものが多く、持続的なプロジェクトはほとんど見当たらない。等身大のヒューマンな《自力更生車》の可動的・可塑的・複合的な特質は、さまざまな展開の可能性を感じさせるものと言えよう。

回遊美術館　《自力更生車＋α計画》出品データ

■吉田富久一　Yoshida Fukuichi　《自力更生車＋α計画》2009 年

自力更生車によるプロジェクト・ワーク／北浦和西口銀座商店街（サイトウ薬局向かいグランスイート浦和常盤前、埼玉県とさわ職員住宅前ポケットパーク）、北浦和公園、ほか

「自力更生とは社会という舞台から奈落へ落ちた者が、自らが努力して社会復帰することです。想像してみて下さい。当事者には失業者やホームレスの他、将来の貴方も含まれるかもしれません。一度落ちると復帰は大変困難です。少しだけ後押しが必要でしょう。芸術家は自らの自立を促し、芸術を持って社会貢献していきます。新たな仕事にチャレンジする起業や、まちの創造と似ていますね。」

《自力更生車＋α計画》参加アーティスト

■牟田口努　Mutaguchi Tsutomu　メンコ屋六文堂

《飛び入り参加　メンコ屋六文堂参上！》

■川島茂雄　Kawashima Shigeo　竹屋のしげちゃん

自己表現否定行為による自力更生の疑似模索。

■長谷川千賀子　Hasegawa Chikako　ガラス屋七輪堂

《手づくりのガラスをいれた万華鏡で街をみよう》

自力更正車２号車、七輪堂では、台車に組込まれた七輪でガラスを溶かすワークショップをする。そのガラスを万華鏡のなかに吊るして、街をながめてみる。

■田中青隆　Tanaka Kiyotaka　あかり屋「ARIKA」

光の仕込まれた「スワルカタチ」をそこに置いて「居場所」を探す連鎖を続ける。

■協力アーティスト：小船正博、天野彩

商店街での自力更生車（左）　浦和西小路でのワークショップ（右）　2009 年　SMF アートのわっ！回遊美術館

生活レベルからの芸術の社会貢献

佐藤 晴夫（新潟市北地区公民館長）

2005年に、旧豊栄市を含む13の新潟市周辺の市町村が新潟市へ合併したが、それ以前、1990年、新潟市に隣接した旧豊栄市公民館職員であった私は、青年層を中心とした市民グループ「ニューフロンティア号」を立ち上げ、新潟県初の野外彫刻祭を開催した。その内容は、中心市街地を走る生活道路・葛塚南線の約450 mを歩行者天国とし、約30点の彫刻作品等を設置しながら、そこに、暗黒舞踏、環境問題をテーマにした映画、地元の伝説、ARTをテーマにまちづくりシンポジウム、さらに、ARTワークショップを持ち込んだ。開催期間は3日間。開催は夜間まで及び、ライトアップされた彫刻群は真夏の夜を彩った。非日常空間に、浴衣姿、下駄履き、家族連れが目立った真夏の祭典だった。

往時、会場の葛塚南線は、「町浦川」という川が流れ、岸辺には豪農の米蔵が建ち並ぶ、この地方一帯の水上交通の要衝だったとう。その後、川は樋となって敷設されアスファルト道路となったが、そこに刻まれたまちの歴史は地下水脈となって、私たちの足元を確かに流れていた。まちが漂わせる何気ない気配。それは地層のように蓄積された歴史の息づかいであり、そこに住む人々の息づかいといえよう。そのまちの息づかいとアートを共振させ、人々のイマジネーションを高め、創造的な空間を生み出そうと、生活道路にアートを持ち込んだ。それは同時に、アートを日常生活レベルに引き戻し、雛をまとったアートを裸にすることへの挑戦でもあった。アートが「まちの風景」とともに呼吸すること、この命題によって、はじめて、アートとまちの生き方が問えるのだという目論見があった。従って、当然、「葛塚南線野外彫刻祭」は、単なるフェスティバルではなく、アートと社会の新たな関係を見出しながら地域活性化を目指したステージだった。

野外彫刻祭は、新潟県内でおいて初の試みであったが、私たちの期待と予想以上に、多くの人々が訪れた。人口5万人ほどのまちに、32,00人が訪れたのだ。来場者はアジア的な活気に満ちた不思議な非日常空間を伝統的な祭りのように楽しんだ。これが私のコミュニティ・アートのはじまりであった。その後も小規模ながらも地域と組んでいくつかのコミュニティ・アートを展開した。コミュニティ・アートとは、1960年代にイギリスで起こった、アートによる地域活性化運動のことをいう。

2008年、「社会芸術」を主宰している造形作家・吉田富久一さんと出会う。それは「社会芸術」の一員でもある長谷川千賀子さんからの一通の手紙であった。吉田さんは群馬県沼田市の商店街活性化アートイベントのために大奮闘していた。驚くべきことに、作家の立場から純粋にコミュニティ・アートを展開していたことであった。しかもそこに明確なコンセプトがあった。そして、何よりも嬉しかったのは、吉田さんの作品「大地の鼓動」のイメージが、当館のアートを触媒とした地域活性化プランにピッタリだったからだ。翌年、そのプランは「阿賀野RIVER祀神祭」となり、日本一の水量を誇る阿賀野川河川敷公園で、アートイベントの舞台装置として、20本以上の「大地の鼓動」が立てられた。夕日が沈む阿賀野川を背景に仮設ステージが設置され、そこで薪能と雅楽が演じられた。高さ3 m余り、逆円錐形の「大地の鼓動」は、柔らかな5彩を放ちながら、阿賀野川の大自然と日本の伝統芸能を赤く染まった大気の中で紡ぎ、日本の美しい風景を生み出した。それは地域の美しさだったといえる。自己の美しさに気付くこと。歴史を刻んできた気高さに気付くこと。それらを織りなした自らの暮らしの豊かさに気付くこと。そこに地域の誇りが生まれ地域の信頼が回復し、改めて構築されていくだろう。「大地の鼓動」は、そのための装置だった。そこで吉田さんをはじめとする「社会芸術」のメンバーは、八面六臂の活躍をみせた。地域の人たちも、その真摯な姿に打たれ「大地の鼓動」の設置を懸命に手伝った。

吉田さんのいう「自力更生車＋α」計画のマニフェストの一つに、ソーシャルキャピタルがある。学術用語言えば、社会関係資本だが、日常用語で言えば、人と人のつながりであり、信頼であり、お互いさまということだろう。この言葉を、今日の多くの自治体が、まちづくりの中心に据え、弱くなった地域の再生を図ろうとしている。地域の安心安全、地域経済の発展、地域の教育的効果を高める基軸となるのが信頼というソーシャルキャピタルということに気づいたのだ。そうしたことを吉田さんは、アートで社会的な責任を果たし、今日の混迷する社会の新たな視界を拓こうとしている。これが吉田さんの凄みだ。だが一方で、途方もない試みともいえよう。例えそれが果てしない試みであったとしても、いつの時代も変革とは、そのようにはじまっていくのだろう。

「大地の鼓動」　阿賀野RIVER祀神祭 2009

アートハウスからアートファミリーへ

高橋 靖史（現代芸術家）

「自力更正車＋α計画」を主宰するアーチストの吉田富久一から、今回は宇都宮でやるので、地元在住作家の高橋も参加してくれと誘いの電話を受けた。10年振りに聞く声だ。

知り合った当時、吉田は群馬で高校教師時代の教え子と共にアートハウス主宰して展覧会を企画運営していた。僕は、吉田から遅れること10年、栃木でアートウォークを1997年に結成し、栃木県内のアーチスト達のスタジオを市民に公開する国内初のオープンスタジオを企画して毎年夏に開催していた。日本でNPOの活動が活発化し始めたころで、未だアート系NPOは少なく、互いに展覧会やシンポジウムに招待し合うなどの協力関係を持ち始めていた。

しかし、程なくアートハウスは家庭崩壊し、吉田はホームレス寸前となる。一方、アートウォークも僕自身が、企画運営する側も来訪者も共に栃木の牧歌的雰囲気のアート散歩にしびれを切らして走り出し、道連れはついて来れずに雲散霧消し、以来、僕はアーチストと言う孤独なランナーにもどった。

左様にアーチストが他人とオーガナイゼーション或はコミュニティーという家族を築き、共に連れ立って楽しく社会の庭を散歩することは難しい。僕は以後、妻と子のいる家庭を持ったが社会においては芸術的独り者、無頼のアート的バチュラーとして生きている。

しかし、吉田はアートハウスに代わるアート家族を再び築き始めていた。彼のステートメントによれば2007年に始まった本計画は生活貧困者でもある芸術家自身から始められるが、やがて失業者、ホームレスも加わり地球的な規模の社会芸術運動となるのだと言う。ボイスやウディチコの「サバイバルのためのビークル」を思わせるこのアイデアは吉田自身が地位と家庭を失いホームレス寸前の時期を経験したことに基づいてるらしい。

吉田のアート一家は、作品を自力更正車という名のリヤカーに乗せてアーチスト自らが行商する。都会にあふれるホームレスの先達よろしく、まずアーチスト自身が作品で自活できる様に露天でアート作品を売るアート屋台だ。確かに市場も流通システムも未発達な日本のアート産業界にあっては、生産者自身が直販する所から再出発するべきかもしれない。戦後の焼け跡の闇市の様に。そう、今の日本のアーチストは高度成長期という経済戦争の終焉後の焼け跡にいるんだろう。アーチストは、そう考えて社会に文化資本の無いものねだりをしないほうが潔良い。むしろ清々しくもある。ギャラリーも美術館もシャッター商店街同様に無人の廃墟のように思えるじゃないか。

僕はどうだろうか。吉田のごとく他人から成るアート一家を率いて、経済戦争後の焼け跡とも言えるシャッターの目立つ街角で作品を売る代わり、骨董屋の息子の僕は父となりアートを家業にした。家族でアートを作り売る。そうすることで家族が一つになって生きることができる気がしている。家族は社会の最小単位だ。親から子、子から孫へとアートファミリーをつくりたい。アメリカで見たアーミッシュのコミュニティーの様に、極度に資本主義の進んだ国にあって文明を拒絶する覚悟を見習いたい。対して吉田は、社会芸術運動により人類が芸術という家に集うアートファミリーとなることをめざしてるのかもしれない。

2010年5月20日

記録

社会芸術“自力更生車＋α 計画”2010 in 宇都宮

2010年4月17日（土）～27日（火）

テーマ

生活レベルからの芸術の社会貢献
現代芸術家による、地域社会復興と生活貧困者（現代芸術家自身、失業者、ホームレスを含め）の社会復帰に向けた思索

アートビジネスの確立
芸術の創造性とまちの創造性をむすびつけるプラクテエィカル・アート

ソーシャル・キャピタル（社会資産）の確認
宇都宮において開催された今回は、地元商店街や福祉他、地域の方々の協力もあり広範囲で展開され、合計2000人名もの観客に恵まれました。

Galleryは7台の自力更生車の基地

Self-powered cart

① 自力更正車　一号車
② 七輪堂
③ 自力更正車　三号車
④ Pizza Mobile
⑤ でまえギャラリー
⑥ ふわふわ堂
⑦ ＋αアポロ99号　真夜中のサーカス団

社会の自浄化 - 自力更生計画

我々は今、国際的規模で始まった資本主義の宿命である輪転原理と対峙しています。国家経済と国民生活の基準が国際間で差し替わる変動です。このような緊迫した状況の中でさえ芸術家たちは自らの自立を促し、芸術をもって社会貢献しようとしているのです。

芸術が自己を獲得した近代以降、次に現代芸術の目指す主題は個人を超え人間を取り巻く社会、宇宙や地球環境、通信メディア等のグローバルな問題にシフトしています。今や芸術表現は、これまでの自己表現の枠を打ち破り、人々の関係性を包括的に統合するソーシャル・キャピタル（確認）の確認の志向へと新たな概念が構築されましょう。これからの芸術創造は、新たな仕事にチャレンジする起業やNPOとも少し似ているようです。

自力更生とは、社会という舞台から奈落へ落ちた者が、自らが努力して社会復帰することです。まちづくりの創造、想像してみて下さい。例えば失業やホームレスに至った方の社会復帰は大変困難ですが、問題の所在が解りさえすれば、少しの後押しで復帰可能になるかもしれません。「自力更生車＋α計画」は、地球上の全ての人々の自立へ向けられています。最初の行動は芸術家から始められますが、間もなく逆境に立ち向かおうとする貴方も加われるでしょう。

社会芸術は、この新しい規範を芸術の創造性と社会の創造性を結び付けたプラクティカル（有用性）に求め、ローカルな場面に芸術行動を起こしていきます。我々はこの活動に賛同する多くの芸術家や市民が増え、次々と「＋α」機能が開発されつつ各地へ伝播していくことで、やがては大きなモーションとなり、地球社会全体が自浄されることを望みます。

【社会芸術　吉田 富久一】

（2010年『社会芸術“自力更生車＋計画”2010 in 宇都宮』企画文）

ギャラリー展示風景

ギャラリー・イン・ザ・ブルーでのプレゼンテーション

4月17日(土)　初日

オープニングプレゼンテーションでビザを焼く安部大蔵

ギャラリーは
11人の展示の会場
であり

Self-powered cat

4月27日(火)　最終日の夕方

駅とギャラリーをむすび　ダンスパフォーマンス

「大きな万華鏡を載せた「七輪堂」　長谷川千賀子は「創造は台所からはじまる」と語る

渡邊恵美子による「ふわふわ堂」編もワークショップ

ギャラリーでは展示と同時にワークショップも行われた

そして、まちへ

まちは
活動の場
となる

Self-powered cart

行動は
ことのあかし

Self-powered cart

人形に成り済ましたダンサーの一人を自力更生車に載せ、
画廊からJR宇都宮駅までパフォーマンス

あいにくの雨天にもかかわらず通り過ぎた
クラウン＊ミーナW.S.Pのダンスショー「無形の魂」

画廊 - 駅 - 商店街をむすぶパレード

4/18, 4/25 二度ある日曜日の朝、画廊から
オリオン通(商店街)までの2.5Kmを、自力更生
車を押して大通りをパレードする

来客と語らう　ギャラリーの青木俊子

ギャラリーからまちなかへ　コミュニケーションという営業

江野町 - 曲師町 - オリオンスクエア

Self-powered cart

4月18日(日)

9a.m.-10a.m.　宇都宮市内パレード（画廊からオリオン商店街曲師町）
11a.m.-6p.m.　オリオンス通り曲師町にて　ワークショップ、アートショップ

自作の出前ギャラリーを操る加藤アキラ

自力更生車3号車にのせた田中清能の創作ランプのオブジェ

駆けつけたファンと談話する小澤正博

「五感の彫刻＝ピザ」で人気を泊した、安部大雅の「Pizza Mobile」　石臼の石は、この地域に産する大谷石

企画について世良と語る吉田喜久一

川島茂雄と長谷川千賀子による野点

長谷川千賀子の提案で、オリオンスクエアの中心にオブジェが置かれた

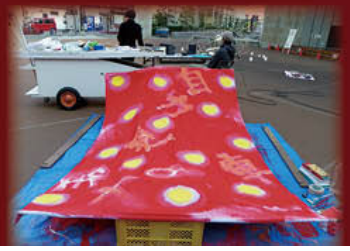
むかし懐かしいわらべ歌をうたう 沈 秀美

4月25日(日)

9a.m.-10a.m.　宇都宮市内パレード（画廊からオリオン商店街江野町）
11a.m.-6p.m.　オリオンスクエア　及び　商店街にて
ワークショップ、アートショップ、パフォーマンス
商店街主催「アート・フラッグ展ペイントパフォーマンス」に参加

子どもたちに大好評だった　安部大雅のピザ作り

南守和孫子と自力更生車3号車に載せた陶器の器



吉田喜久一は、地元の商店街主催「アートフラッグ展」へも参加
市内の参拝者とともに、アーケードに飾りの木枠の額を付けられる

コメント集

その１　参加者のメッセージ

アートの手

長谷川　千賀子

七輪堂とアートの手

ワゴン「七輪堂」は、素材にじかに触れてものをつくるという美術のおもしろさを体験する「場」をもつことを目的としたワークショップ車。

ひろげるとテーブルになる。内部には水タンク、折り畳みの椅子、七輪が組込まれている。ガラス、粘土焼成、金属の加工や鋳造など、火をつかう様々なワークショップが可能である。また、煮炊きをし、食事のテーブルともなるので、「食事と会話」というシンプルで基本となる「生活とコミュンケーションの場」をこの可動の手押し台車はもたらすことができる。【社会芸術・自力更生車２号車】として吉田富久一氏が長谷川の希望をとりこみ、2009 年に新潟潟川での祀神祭にあわせ制作された。

【コンセプト】

炎をみつめるだけでも、人は力を得る。石にさわり、土にさわり、風をかんじとる。「さわってものをつくる」ということによって生きるエネルギーを得る。疎外され、機械化されていく社会のなかで「アートのはたらきかけ」(Art of Practice アートの手法をつかうこと）が重要である。

【由来と今後の展開】

『はじまりのアート』はどのようなものであったか考え、2005 年にインドでのシンポジウム参加の後、仲間と何度かワークショップなどを試みた。（鋳造の原形と考えられる、インドのドクラ式鋳造の研究。インド風の野焼き。サンポーニャと呼ばれる最も原始的な笛の制作。土鍋を楽器として台所での焼き物焼成をすること等）

炎をあつかう術を知ったことが人類の始まりと言われるが、炎をかこみ、食事をするなかで、煮炊きの炎とかたわらの土から、器や土偶がうまれた。踊りや音楽もいっしょだったことだろう。人と動物とを分ける炎は、ひとつのアートのルーツであり、アニミズムの至るたいせつな心のはたらきだ。

炎の象徴として七輪堂の名を冠した。

土　水　炎　ガラス　石　金属　という元素ともいえる素材にじかに触れ、食卓をかこむような、「コミュニケーションの場」となるワークショップとして

- ・ガラスをつるした万華鏡造り（埼玉県立近代美術館での回遊美術館にて実施）
- ・七輪でガラスをとかしてみる（埼玉県立近代美術館での回遊美術館にて実施）
- ・粘土を握ったかたちから箸置き等をつくり、土鍋で焼いてみよう
- ・七輪の火で竹を曲げて　茶杓をつくる
- ・七輪で金属を熱し、たたいてヘラをつくる
- ・ドクラ鋳造（アトリエ IZUMI において実施）

などを、共同で考えていきたい。

【自力更生車＋α計画について】

わたしは近年コミュニケーションということにアートの観点（立脚点）を持ちたいと考えている。自力更正車においては、アートというアイデアを生かして、起業するという目的がある。そのために、「アートの手法」つまり、アートに何ができるか、ということを自己に問いかけてみる時、実際のはたらきかけとしてのアート（Art of pratice) の重要性を思い出す。Art of practice ということば聖路加病院の医師日野原先生の著書に患者さんに対して声をかける時に「アートの手法」として述べられている。引用させていただくと、「自然科学を基盤とする近代医学は医の心を遮断し、患者、家族、医師、看護婦のコミュニケーションを失った。それを取り戻す技術、失われたものを回復するすべをアートと呼びたい（Art of practice of medicine）［医療の美しさ］という項目で、「いのちの言葉」という著書のなかにある。

「ことば」「身振り」「気配」様々なものにアートの手法がはいりこむことで、心に届くことがある。

アートを固定的な作品（存在そのもの）として捉えるのではなしに、媒介（はたらき）として捉える－という考え方である。

現代が情報の過多と多様のなかで、コミュニケーションという問題を孕んでいるということは、誰もが認めることだ。自力更生車は、アートの手法（Art of practice）をつかっての仕事（起業）と理解している。

【ソーシャルキャピタルとしてのアート】

作家ができることは、経済性の至る効率優先のなかで、一見「無駄」ともおもえるアートのはたらきかけが、人間の生産の根幹にかかわる、というなげかけを続けていくことだ。（名称がはっきり思い出せないが、ベルギーに本部をおく経済機構本部の主旨に経済生産が愛の主体によってなされるべきだ、という一考がある）

経済においては＋αという思索が中心となる。「より一層便利であること」「より一層効率があがること」「より一層経済生産があがること」それらが、もっとも重要なことであり、－αがとりざたされつことは、ほとんどないが、－αとしての思索「本当にそれが必要であるか」根幹にある「プリミティーフ」は人間にとって大変重要である。人間として根をもつことの重要性である。

【芸術の手】

インドのマザー・テレサ（修道女）が全くどの宗教に属しているか、など問うことも、そこに結びつけよう、ということもなく、「ただ、手が必要なのです」と行ったこと　その仕事にインスパイアされている。

かって、アーティストは多分にアニミズムのシャーマンでもあった。個人的には彫刻という原始よりの素材とかかわる作家として、また、ひとりの人間として、わたしには　ある意味のシャーマンともよべるような神話をさがし、表現しようとする欲求、つまり失われた記憶（イデア）への渇望がある。イメージの手もまた　翼となってくれる。

共通の神話が失われて、神話や宗教をバックグラウンドとして成立していた芸術は存在の基盤を失った。個人の作家は、おのおのの記憶を掘り下げて、広大な無意識のなかから、根幹となる神話を捜しているようにも見える。そこには様々な宗教や理念、主義を越えた「手」の存在があるとおもう。争いということから、遠ざかる手法でもある。

2009 年 12 月

宇都宮の社会芸術活動における自力更生車活動に参加して

衞守　和佳子

「アーティストにも生きるための哲学が必要である。」今回の社会芸術計画に参加した私のストレートな感想である。言葉だけ聞くと強い主張のように聞こえるが、アートをする以上は表現と同時に作者の生き方や考え方の大切さも表現の一部である事を改めて強く感じた。私にとって、とにかくこの企画が人材豊富でユニークなアーティスト集団であった。人柄の温かさも魅力的でした。

さあ、この活動で何が面白かったか、私からしたら自分の作品を担いで裸で街に飛び出したような物であった。少し斜に構えて作品を展示しているのが作家という様な感じを、見事に小気味よく覆している。

元々私も、野外美術展の企画やワークショップを十数年間横浜の森の中で展開していたので、根本的にはこの活動の意味合いは、良く解っているつもりである。そして、街の中での人たちの反応も何となく予想していた。しかし、そんな細かいことはもうどうでも良い、とにかく「人」として街の中に放り出された感じであった。そして時間と共に少しずつ、街の人との距離が縮まっていく様な感じがした。

私は、「アート」とは元来人々の生活の中から生まれていると考えています。その中から秀でた物が「芸術」と呼ばれ特別なものとして扱う場所が出来、だんだん庶民の生活から離れてしまったと思っています。今回の社会芸術活動は、アートを庶民の中に戻して流通させて生活の元を築いていこうという主旨のように感じていた。私は何でもやってみないと理解出来ないので、正直この活動を面白く見ています。作家はどうしても制作時間を増やすために一人の時間を過ごすので、作家同士の交流の場としての可能性を感じました。ただ一人で決められた空間に作品を展示するのではなく、人の集う道に出ていくという行動の大きさを認識していきたいと思っています。

今回は宇都宮という場所でしたが、長期にわたる計画と持続的な活動が、今後求められていくと思います。地域への思いも含めて考えていけるような基盤を今後とも考えて頂きたいと節に思っております。この企画に参加させていただいたことを感謝しております。

2010 年 9 月 25 日

社会芸術 " 自力更生車＋α計画 " 2010 in 宇都宮のイベントを終えて

♪♪♪♪♪　沈　玲美

今回美術作家の活動に混じり、音楽（うた）で参加した。イベントテーマに前進を色濃く感じ、〈歩くうた数曲〉、わらべうた、仕事歌、そして宇都宮のある栃木及び隣接県の県花のうたなど 30 曲。時間にして 70 分程。ギャラリーを出て市で最も繁華な商店街のど真ん中！だが人波は少なかった。難しい理論はさておき、うたでひととき、心を休めてもらうことが出来れば、芸術の社会性につながると思う。集客工夫して今後も活動したい。

「術（ジュツ）」について・・・

田中　清隆

「芸術」「美術」と言う位なので、「術」でなければいけない、「術」がなくてはならない。「術（ジュツ）」＝わざ、技芸、学問。もしくは、不思議なわざ、はかりごと、たくらみ・・・(広辞苑調べ）らしい。

つまり、長けた能力や技巧、なんらかの特別なもの。「普通では出来ない」ことを意味するようだ。

それが、「術（ジュツ）」。そして、ことのほか思いつく他の「術」は、「話術」「手術」「忍術」「奇術」「武術」「戦術」などなど。やはり何かを「極めて」いそうな事ばかりで、簡単な事ではない。そして、考えるにしばし、自身の表現・造形（制作）は、「術」なのだろうか？「術」と呼べるのだろうか？期待と不安の中でも造り続けるだろう作品たちの着地点は、どこに？それを探り続けること？

では、はたして「社会芸術」とは、何に対して、どんな「術」を使うのか？タイトルから察するに「社会」に対してなんらかの「芸」の「術」をもたらすことのようだ。では、それほどの行為は、どこにあるのだろう。誰が出来るのだろう。なんだか耳ざわり良く、あたかも人に対して貢献度が高そうな「社会芸術」とは、一体何だろう。未だ思考の現在進行形？

『ある日の夕方、小学校の校門を出るとそこには、子供たちの輪。ヘンテコな大人が、透明の液体を付けた筆で紙をなぞる。そして、そのあとに数色の粉（粒）を手際良く振りかけては、それを繰返すといつの間にかその紙が「絵」に化ける。そんな、驚きを見た。そして、それは、「砂絵」と呼ばれることを知る。また、ある日の学校帰り、知らない大人が、中心のこどもの輪を見つける。何やら厚紙からひとさし指に付けた。その何かを親指で擦ると指の先から「煙」が出る。なにも燃やしてないのに「煙」が出る。そして、またある日・・・・・子供たちの輪。そこにはまた新たなる驚きが待ち受けていた。そこには、誘惑や感動や斬新な未知の世界の入口が存在した。引き寄せられる魅力、これは、「魔術」か？とも思っていた。今言えることはひとつ、確かにこの時のあやしい大人たちは「術」を使ったのである。少なくとも子供の私には、そう見えた。』

「術」はこれでよいのだ。きっと「社会芸術」もこのあたりにヒントがありそうだ。すこ～しだけ人を驚かせること、ちょこっとだけ誉め付けるもの位に止めて十分なのだ。「社会芸術」などと大上に構えなくても、あの頃の町かどに実は存在していた「それ」が語っている。それでいいのだ、と。そんなことを思いつつ今回の「芸術」は、一旦終了する。

ココニミエテキタ、ボクノ「技」ハ、「術（ジュツ）」カ？ワカラナイ。「芸術」モドキ。「美術」モドキ。

2010/06/ 某日

社会芸術自力更生車＋計画 2010 in 宇都宮 に参加して

渡辺　恵美子

社会芸術・自力更生車・吉田さん、そしてみなさんの熱く語る姿に、不思議な魅力を感じました。お互いに激しく意見を戦わせ論争しあっている。それはとても新鮮に見えました。なにかを模索しつつ、ひたむきに美を追求している前向きの姿勢に、強く心惹かれ参加してみたいと思いました。

私はこれまで芸術は自己表現と考えておりましたが、芸術とは、個々の狭い分野での芸術でなく、個人と社会が創造性を豊かに育みそだてていく。社会規模のものとして考えると、視野が一段と広がり新たな発想が生まれます。新しい試みをしてみたくなります。

今は個々の創造性が生かされる機会は少なく、社会は合理的な数字を追うものと、だんだんと追い詰められて、創造性を失い無気力となるものとに、分かれつつあるのではないでしょうか。素漠とした時代とならないように私達の未来が希望にあふれる社会になるように、芸術は今こそ不可欠なもの大切なものです。

自力更生車の活動は新しいひとすじの光となるのではないでしょうか。

私も自力更生車を動かしたくなりました。私の車は今住んでいる古い茅葺きの家です。自力更生車のように街中に繰り出すことはできませんが、茅葺きの家を維持していくために、どんな展開をさせたらよいのか、迷っております。私にとって家は自力更生車そのものです。維持することを基本に考えて、歩んでみたいとおもいますが。茅葺きの家から創造性そして創作のよろこびなどを発信することが出来ますように、茅葺きの家が、家自身のちからで、自力更生への道を登り、しっかりとあゆむ力を、生み出せるようにと願っております。

自力更生車＋α計画について

小船　正博

僕が考えるにアートプロジェクトやワークショップは以前には成功した例はいくつもありますが、今や全国、世界ありとあらゆる場所で行われ飽和状態になっていると思います。今日のそれらを見ても、地域または社会に根付いているものをほとんど見たことがありません。

そこでいくつか疑問を抱き、思い浮かぶことを書きます。

果たして、プロジェクトが社会や地域に住む人々に根付くのか甚だ疑問です。また、これらの多くは作家のエゴになりかねない危険性があり、だから期間中だけのイベントで終わってしまうのではないかと。プロジェクトやワークショップでのコミュニケーションを否定している訳ではないが、長期的なコミュニケーションでないと社会や地域には受け入れられないと思います。

芸術、芸術家が社会、地域に貢献すると言うことはとても難しいことです。特に日本では、創造の力によって社会にアプローチして行くのはとても素晴らしいお仕事だと思います。しかし、社会や地域がそれを欲しているのか、芸術の力を必要としているのか。答えは恐らく "NO" だと思います。

僕にとっては今回一番創造力を感じたのは渡辺宅での討論やけんか、おもてなしなどの全員が集まってのコミュニケーションに芸術の力、創造の力を街での展開より強く感じました。こういったスモールスケールな、ただのコミュニケーションに 10 年代のアートの形、新しい創造の力が形成して行くのではないかと思っています。

これからは新しいコミュニケーションの形と実践が必要だと思いますが、それも作家が個人として自立した人間であることが大前提であると思います。創造力が個人に託されている以上、まず芸術家が創造的な人間になる必要があると思います。芸術あるいは人の創造の力とは個人個人に委ねられている、だから美術家は美術家で要られるのだと思います。

"相乗する魂"　自力更生車＋α計画に参加して

クラウン★ミーナ W.S.P.

宇都宮の地で自力更生計画の一端を担うべく、我々 クラウン★ミーナ WSP! は本番までの稽古期間中、各々『無垢の魂』の模索・追求に励んできました。

一切の概念を取り払い、純粋に認識する主観でもって、己自身の『無垢の魂』を追求することは芸術家に留まらず、個人の人間が人間として向き合っていかねばならないことです。

今回の企画において、それらを伝えてゆくことが、我々・身体表現者の役割と再認識させていただきました。

自力更生車との融合、ギャラリーでのパフォーマンスは直前まで、最大限イメージを膨らませていました。自力更生車にパフォーマーが"人形"として入り込んだ瞬間の感動は、言いようがないほどの衝撃がありました。世界でただひとつの"命"が誕生した瞬間でした。

まさに『自力更生車＋α計画』の名に相応しい融合であったと思います。

その産声を聴いた人々は僅かではありますが、全員があの瞬間 'The mother of creation' になりました。

そしてパレードへ送り出すとき、見守る人々の中には愛おしさが芽生えたはずです。

"かわいい子には旅をさせよ"

あのときから降り始めた雨も、単なる悪天候ではなく、自然のもたらした相乗効果となりました。それは、多くのお客様が温かい眼で最後まで見てくださったことが何よりの証と感じております。

パレードとは別組のギャラリー内パフォーマンスもまたしかりです。

作家の皆様の命が吹き込まれた作品に囲まれた空間は、心身共に研ぎ澄まされ、作品のエネルギーを感じて心地よい刺激をいただきました。

自力更生車の周辺

加藤　アキラ

社会芸術というからには社会への有用性がキーワードになる。吉田富久一から参加を呼びかけられたのが今回のアートプロジェクトだが、興味があったが疑問点も多々あったので参加するか否か決めかねていた。生来のトーク下手で、はたまた人付き合いが苦手、それにだいぶ年齢が重んでおり、気力と体力がプロジェクトチームのメンバーと共に行動できるかどうか危惧していた。あれこれ思案してみたものの結論には及ばず、「エーイ理屈より実践ダー」と、課題を抱えながらも見切り発車で参加することになった。

既存の芸術のメディアは（ここでは私見なので美術のジャンルに限らせて頂く）表現媒体を通して送り手と受け手の関係で成立していた。しかし、社会構造が拡大し細分化が進み、さらに情報化は加速し非物質的な社会へと重なっていくと、美術と社会の関係は次第にリアリティを失う。とは言え、物が否定されたわけではなく、産業経済の構造の中で主要な位置を保っている。さらに、複雑に重層化していく資本主義の現在を、グローバルな視点で冷静に見詰めると、危うさ感を禁じ得ない。ところが、他方で最近の美術会では批評というフィルターを迂回して美術市場そのものが台頭し、ブランド作家が続々とつくり出されている。ここでその是非を問うつもりはないが、資本主義のしたたかさには驚異を感じてもいる。

資本主義は世界のすべてを商品にしてしまう。そのために世界の民族は翻弄され、惑わされ、侵略され、制度化され、民族は民族の精神と誇りを失っていく。経済至上主義をとるか、民族の精神文化をとるか、その選択権は他国の民には無い。

世界は好むと好まざるに拘らずグローバルの波に晒される。そしてフラットになっていく。だが、私にはフラットという未知の世界を、ポスト資本主義なのか、或は世界の崩壊なのかもイメージできない。

宇都宮の４月は寒暖の差が激しく身体にこたえた。私のプランＡは手押車の屋台に室内展示用の商品を吊り掛けて、駅前通りのギャラリー・イン・ザ・ブルーから中心街のオリオン通りとの間を行脚。プランＢはオリオン通りの中心部にあるオリオンスクエアで無人の露店屋台ギャラリーで、室内展示用の小品を販売することだった。しかし、無人の屋台ギャラリーで作品が売れるはずもなく、結果ははじめから想定されたこと。自分の臆する部分を露呈してしまうのでは、いっそ叩き売りでもと考えたが、実際の物品販売とパフォーマンスの境界を考えているうちに、その機を逸してしまう。私の屋台「でまえアートギャラリー」の自力更生車は未完のまま、先ずは終了。

全国的に地方の中小都市の殆どはシャッター街になっている。この現状と比較して、宇都宮の中心街はだんトツの賑やかさを保っているのには驚かされる。資本主義と文化が仇同士みたいに拮抗していて、往来する市民の躍動感も小気味良い。

今回のアートプロジェクトが宇都宮の地を選び、町の役員の方々に受け入れられたことは幸運であった。しかし、その半面アートプロジェクトの現状と町を往来する人びとの反応に距離を感じたのは私だけだろうか。供給過剰な現代社会ではあたりさわりのない物や情報だけで人びとを繋ぎ止めることは容易ではない。たとえそれが創造物であったとしても。

創造力は芸術家の特権ではない
若い貴方が芸術家であるなら
人とヒトを繋ぐきっかけを創ることにほかならない

私も老いた。それでも、もう少し一人の現在でありたいと思う。

"春一番の空回り"宇都宮計画の経過と問題点

社会芸術　吉田 富久一

はじめに

雨の中で踊り続けるクラウン★ミーナ W.S.P. の４人組の演技を観ながら、演技とはまったく別のことが脳裏を渦巻き、いたたまれない思いに駆られる。

この日は 11 日間に及ぶ会期の最終日にあたるのだが、彼ら４人組にとっては、まぎれもなく初日である。しかも、昨夜遅くまで稽古に集中していたことは、会場に着くなりの高揚ぶりから察しられた。演技が進むにつれ、西として上出来であることが確認されると、ことさらである。

社会芸術では、この度の企画趣旨を「芸術家は自らが開発したプラクティカルなアートを自力更生車に乗せ、画廊から飛び出し、街角や広場でワークショップを展開しながら市民とのコミュニケーションをとる。自らの不定を乗り越え、今日の社会問題である失業者やホームレス等の生活弱者にも仕事と小さな経済力を持たせて、社会復帰の可能性を誘う。資本主義破綻後に生き抜く知恵と姿勢を社会資産にした民衆の芸術運動」と謳いあげた。

しかし、参加者各位にこの趣旨がどこまで浸透し実践されたのだろうか。また、自らも夫々の関係性の構築に不十分ではなかったか。事業を全うした到達感に覆い被さるように、敗北感がマーブルしてくるような感覚だ。

１、企画の進行

本件は画廊主催としながらも、企画主体は社会芸術にあり進められた。

参加呼びかけの対象は表現者に留まらず、弱者救済を目指す社会事業体も含めて検討。その中でホームレス支援にあたる出版社一社に絞って交渉したが参加には至らず。結果として芸術家のみで編成された。また、宇都宮在住者への呼びかけでは参加は１名に留まるものの、幸いにも他の彼等は裏手に回り協力を惜しまない。

はじめ、画廊外の場所に近在の公園を想定。前年春より市の緑地公園課と交渉をすすめたが、使用規程に阻まれ活用を断念。それに替えて同課から商店街に隣接するオリオンスクエアの紹介を受け、先ずは主たる会場に定める。これを機に商店街へ矛先を向ける。だが、知人を介しての商店街関係者への打診は座礁。八方ふさがりのとある日、下野新聞にオリオン通りアートフラッグ展の記事に目が留まる。願おうかこの行事、我々の企画期間をかすめており一筋の光明を得た。

オリオン通りが二つの商店会で構成されていることは、地元住民でさえ知る人は少ない。これを取り違えたまま９月より事務所との交渉を行うが、進展せず。年明けて直接訪問した先が他方の未交渉の事務所。とんだ失態である。ところが、間違えた商店会の理事に受け入れられると、先に交渉をはじめた商店会もこれに従いオリオン通りの使用があっさりと許諾された。

道路使用には、商店会とは別に所管する市役所の土木課の認可が必要であり、それらをもって警察署の許可が下りる手順になる。だが、順調にことが進むかに見えた矢先、またもや問題発生。土木課の許諾条件に、他に市の何らかの部署の関与が必要だとは。会期が切迫する中、商店会理事からの助言もあり、商工振興課の職員のお骨折りでようやく許諾に至る。直に警察署へ駆け込み、手続きが完了したのは会期の５日前であった。

２、参加者の立ち位置と企画の格子

宇都宮は新幹線や高速道を使えば都内への通勤も不可能ではない。しかし、参加メンバーの多くが東京近郊あるいは群馬、茨城に住まい、夫々が 100Km 前後の距離を保つ。こことの往復は時間と経費がかさみ大きな負担となる。そこで、通いよりも宿泊の方が有利と判断されたものの、参加者が自腹を切る覚悟でない限りどうにもならない。

幸いにも画廊からの助力が得られ、必要最小限の宿泊がかやぶきの家に確保される。不足分は大谷バウハウスに救援を求め、宇都宮滞在が補償された。

起案では、参加者が宇都宮滞在を前提に画廊より自力更生車を展開させて日常的に市民とコミュニケーションをとり、画廊やオリオン通りでのイベントの集客に結びつける。信頼の構築が社会資産として優位に働き、創造性に勝る事業を開拓行為して資本主義の枠組みを打破、信頼への拡張を狙った。

ところが、現実には会期を通して滞在できる参加者が無く、平日に画廊から周辺へ出向くゲリラ展開は的を外し、各々参加作家の住まいと宇都宮の往復の構図に差換えられ、計画は空転しはじめた。これではメディアも食いつかないし、単なるイベントに落ちてしまう。

平日の展開に大穴を空けたところへ、地元参加作家であり宿舎かやぶきの家の主でもある渡邊恵美子から助け舟が出された。我々異邦者たちの接待と交互に、画廊を守るようにワークショップが展開された。唯一の地元参加者に頼るところは大きい。しかし、まちなかへのゲリラ展開には届かず。

3、展開

以下に事業展開の概要を述べるにとどめ、参加作家の個々の展開と見解については、記録写真（p.14）と参加者コメント集（p.19）に委ねたい。

a) 初日プレゼンテーション

参加作家が一堂に顔を合わせる初日、夫々の「自力更生車＋α」の内容をお披露目する機会とした。そもそも画廊はプレゼンテーションのためのショールーム。展示やワークショップの場であり車庫も兼ねる。床に自力更生車を配し、壁面を中心に企画関連資料として作家作品や参加者紹介に当てられた。

この日の集客は主催画廊に委ねられ、美術関係者を中心に意見交換と交流がなされ賑わうが、11 日間におよぶ苦闘の幕開けでもあった。

b) 市街地パレードとワークショップ（曲師町）

画廊からオリオン通りまでの 2.5km 程の道のりを自力更生車７台のうち５台で押しての移動にパレードを兼ねる。市内の朝は駅へ向かう人以外は疎らであり、露出効果は大きいとはいえないが、移動の必要をプラスに向ける行動は必然の行為。我々はそのまま曲師町の大規模なアーケードになだれ込み、通りの中央に隊列を組む。

路幅が程よく、全天候とまでは言えないが雨天時の心配は要らない有利な条件。ここでのアートショップ展開は市民との交流も円滑に行われ、商店街の賑わいと一体となり、まちの日常風景によく溶け込んでいた。

この商店街の場合、他の地方都市とは比較にならない賑わいが保たれている。だが、人びとからは衰退した今日を嘆く声が聞こえてきた。

c) 市街地ワークショップ（オリオンスクエアと江野町）

オリオンスクエアは中心市街地活性化の策で設けられた屋根付ステージを持つ大きな施設。オリオン通りに隣接し商店街と一体感があるように思える。だが、組織母体が別で縦割管理に矛盾あり、しばしば相互の融合を阻害することがある。この度は、商店会が我々の活動の受容し理事の助言もあって問題は回避された。おかげで、長谷川千賀子からの提案で広場中央に置かれたモニュメントを軸に、商店街へ踏み込んだ大きな環を描く配置ができた。さらにこの日の終盤、沈玲美のうた声が人影の疎らな会場の隅々まで浸透し一帯を和やかに包み込む。

d) 最終日のダンスショー

文頭に述べたとおり、クラウン★ミーナ W.S.P. の奮闘にエールを送りたい。

4、まとめ（評価）

参加者の頭数が揃っても各々が生活の礎を別に持つかぎり、遠隔地での長期滞在の展開は無謀であった。しかも有利に持ち込んだ宿泊所の確保が、反って参加者にイベントにポイントを絞った行動を助長してしまったようだ。結果として、市民との接触は参加日のみ。自力更生車でのゲリラ行為はなし崩され、狙いであった日常的なコニュニケーションによるまちの評判とはならず、集客に結びつけなかった。また、会期迫っての参加条件である自力更生車の保持を拒否した一部作家には閉口するが、出航した船隊は威力が十分に発揮されずとも隊列を崩さず、残された可能性に賭けるしかない。

苦境の中でも善戦した一例として、安部大雅の自力更生車仕立ての [Pizza Mobile] がある。客がピザ生地をのし棒で伸しトッピングを楽しみ、十分に熱しられた石窯を覗き込みながら自らの手で焼き、焼きたてを食す。一般の屋台にみられる食販ではなく、ピザづくりを食の彫刻と位置づけ、五感の総動員を促すワークショップである。食の彫刻、これは長谷川千賀子の言う「台所は創造の始まり」なのだろうか。この人々を魅了した創作体験は、結果としてアートビジネスをも成し得、本企画に真っ向から取り組んだ好例として賞讃に値する。また、窯石は大谷の重鎮、渡邊家から譲り受けた大谷石。窯の機能を保つも工作を最小限に留め、彫刻としての実在感を損なわない。ここでも渡邊恵美子の恩恵に授かり、参加者間の協力がそのまま地域間の交流を満たす必然は、本企画の最大の成果だと言える。

この度の企画で我々は、遠隔地での活動や多くの機関との連携の困難さ、芸術家の実生活の維持と保障、芸術家自身が執拗に持ち続ける私的な個人主義の壁に阻まれ、社会芸術への理解の深度と取り組みの困難さに悶えた。これら未消化の問題は、あらためて角度を換えて仕切り直さねばならない課題となった。その上でことさら、ソーシャル・キャピタルの維持発展の重要性を確認する。

ともあれあまり粋がらずに、散々たる不満よりも心ある方々と行動を共にできた実績に喜ぶことの方が素直なふるまいだろう。

＊本文は EU・ジャパンフェスト日本委員会へ提出した報告文の再録

コメント集

その２　　安部大雅氏より吉田宛のメール

Subject:　　宇都宮企画、他

安部大雅

Date: 2009 年 12 月 27 日 17:40:51;JST

吉田様
資料を送っていただきありがとうございます。
C さんには資料を拝見して自分に何か出来るようでしたら参加しますと伝えましたが、、、
誤解されるような言い方をしたのかもしれません。
吉田さんが具体的な活動の意図を書いて下さったので僕も思っていることを書きます。
生意気なことを書くかもしれませんがお許し下さい。

参加について、正直躊躇しています。
吉田さんの活動が理解できないというわけではなく、
僕自身の制作スタイルとどう交わるか不安を感じています。
僕はあらゆる社会性、宗教、自分自身のコンセプトすらなるべく表に出さないように。
ただ心地よい形、あわよくば美しいと思ってもらえる形の追求を制作活動の中で行っています。
それを見る側の人と分かち合うために芸術を普及させるためには自分が予算を持ち出すことも厭わないつもりです。
それが地域活性やイベントの見世物として利用されるのも構いません。
ただ今回のアート展は主旨がかなり限定されています。
総合的なアート展においてはいろいろな表現者がいて、
違った形を見る人が自由に選択、鑑賞、評価できます。
僕は芸術で何かのムーブメントを起こす活動よりも、
ただ形や空間を作っていく職人的な作家でありたいと思っています。
その僕が今回のアート展の中で何が出来るか、今は何も思いつきません。
可能でしたらもう少し考える時間をいただければと思います。

それでは、
良い年を迎えられますようお祈りしています。
安部

Date: 2010年1月20日 11:16:30:JST
吉田様
貴重なご意見と経験談をありがとうございます。
大きな刺激と共に今後の自分にプラスしていかなければならない要素が多々ありました。

昨年末企画内容を頂いてからいろいろなことを考えました。
アート展へのお誘いを受けたときはいつも
気乗りがするかしないかは関係がなく
自分のやり方がその主旨に「はまるか」ということを気にします。
誘っていただき参加する以上は企画者の意図達成の力になりたいと思います。
今回ももちろんそれを考えました。
移動車を引いてアートでコミュニケーションを取りながら
しかもホームレス救済の足がかりになるようなこと、、、
今まで自分がやってきたことと大きく違いますしました。
なぜ僕に声をかけてくださったのかも不思議に思うような企画です。
お仕事なら何だってやりますがこれは自費です。
ピンと来るアイデアがないのに「はいやります」とは言えませんでした。
お手間をかけさせてすみません。

僕も吉田さんの言うようにオリジナリティーは自立させるものではなく醸し出すものだと思ってます。
新しさよりも今を生きる作り手としてまじめに研究しないと過去にも未来にも繋がらないと思い
見る人達と共に一緒に芸術的な成長をしていきたいという目的で活動してきました。
あらゆる社会的効果はその副産物であって僕自身の目的にしてはいけないと思ってきました。
吉田さんやCさんの文章を読んで
僕の中で別々だったものが同義であるような気がしてきました。

アトリエで一人、形の研究を楽しんでいる現段階の僕にはまだ早い活動かもしれませんが。
何事も経験だということで是非参加させてください。
いまだに何も思い浮かびませんが今月中に何かしらアイデアの原案を出します。
足引っ張ったらすみません。
よろしくお願いします。
安部

Date:2010年1月28日 8:42:37:JST
吉田様
こんにちは。
時間も迫ってきたのでない知恵をひねり出しました。
自分の普段の活動と今回の主旨がどうしてもリンクせず
アート展の主旨だけを1から考え直しました。
その結果思い切ってピザを売ろうかと思っています。
許可が取れればの話ですが、、、以下にご説明します。

1、+α事業の「名称」
Pizza Mobile

2、同　　「内容」
手作りの薪釜を積んだお客が作る移動ピザ屋。
耐火レンガの釜、大理石の伸し板、食材、薪、すべて搭載。

3、同　　「コメント」100字程度（＊参考:同遊美術館「+αの提案」文）
自分のため、もしくは誰かのために考えて作る。
形はどうしようか、具は何を載せようかと悩み楽しみながら自分の手でピザを作る。
これだって出来上がった喜びを感じ、まさに味わうことが出来るアートだと思う。

自分のやっていることにこだわりすぎていたので考え直したらこれが出ました。
イタリアで学生の頃ピザ屋でバイトしていて、いわばこれは僕の特技です。
当然食品では問題があるかもしれません。
アート展という主旨からもはみ出てしまうかもしれません。
しかし「食べ物は人を呼ぶ」という事実もあります。
主旨としては売り上げを出さなければならないわけですし、
アートへの入り口を大きく広げるためには1台くらい必要かと思っています。
関係各位、保健所等の許可申請などを含めてＯＫ取れるでしょうか？
以下に祭事の食品販売許可についてのＵＲＬを貼っておきますのでご確認下さい。
よろしくお願いいたします。
安部

Date: 2010年4月20日 9:32:52:JST
吉田様
メールありがとうございます。
このメールで参加者皆の士気がグンと上がると思います。
吉田さんが一番大変でしょうに、本当にお疲れ様でした。

参加者は皆、吉田さんの努力やテーマへの思い、進行の苦労も分かって付いて行ってます。
Aさんももちろん、他の人より長く吉田さんを見ているわけですから。
その上でこのメールのようなほんの一言が大事なんだと
言っているように僕には思えました。
参加者の士気は現場でのアクシデントや客の反応などで浮き沈みしますが、
大将に一言ねぎらってもらい、先への希望を示してもらえれば、
この大将のために死のうと、また戦に出向いて行けるんです。
この企画の中でのB君の精神状態だって吉田さんの一言で変わる気がします。
吉田さんは参加者でもあるわけですから非常なご苦労お察しします。
しかしこれは大将である吉田さんにしか出来ない仕事です。
閉会まで共にがんばりましょう。

Dさんから記録写真のメールをいただきました。
しかしおそらく添付忘れで何も付いておらず、
再度確認の上送ってくださいと直接返信いたしました。
ご対応ありがとうございました。
それでは
安部

コメント集

その3　吉田から安部大雅氏への返信メール

親愛なる彫刻家　安部大雅　様

吉田 富久一

Date:　　2010年1月17日　13:45:41:JST

安部大雅　様

年末にメールいただきましたまま、返信をためらっていました。貴兄本人の芸術理念とこの企画の試みの両立を割り切るには、時間は必要だと思いましたから。そして、貴兄の誠実な態度に痛く感銘しましたので、私もまじめに応えなければいけないと思い長文のメールとなってしまいました。

「僕は芸術で何かのムーブメントを起こす活動よりも
ただ形や空間を作っていく職人的な作家でありたいと思っています。
その僕が今回のアート展の中で何が出来るか、今は何も思いつきません。
可能でしたらもう少し考える時間をいただければと思います」

「僕はあらゆる社会性、宗教、自分自身のコンセプトすらなるべく表に出さないように
ただ心地よい形、あわよくば美しいと思ってもらえる形の追求を制作活動の中で行っています」

とても良く解ります。実に吉田も永い間、おそらく貴兄と同様に考えて制作してきましたから。

真に正当な造形追求は絶対造形の域に達し、完全造形美を希求した作品を創り出すことが作家の本命であり、そうする責任があると思います。過去の画歴（瓦礫）や受賞歴（呪傷）の山の大方が、それを証明するのに十分です。

今でも外部からのご要望にお応えできますし、たまにあればそうしています。そうしても、過去において自分の表現のカテゴリーに含まれていたのだから何も問題ではなく、後ろめたさもありません。すべてを隠すこともなく、素直に認めれば良いことですから。

本日は、吉田の芸術観を述べさせていただきます。もし、苦痛に感じられましたら読まずに閉じて下さい。

吉田は比較的早い段階で、絵画における絶対造形の完成に至りました。

1976年に卒業して直ぐに、山間僻地の武尊高校（沼田よりさらに奥山の果、武尊山の裏、尾瀬の入口　現：尾瀬高校）に赴任しました。都会から遠く離れての暮らしは、甘い画学生上がりの若者を、深刻な孤立に陥らせ、自己壊滅の危機に至らしめました。

この瀬戸際の経験から、逆に自然回帰へ昇華する有利にチェンジすることを思いつき、「造化」の概念が養われました。

造化とは、人間は自然を支配するものではなく、自然に含まれるものであるという態度です。そして、私にとってその方法が造形だと考えました。すべての創造は自然の存在の解釈であり、それを見える形に置き換える行為が創作であり、存在の証す形象が表現であり作品である。

これは絵画に留まらず、立体や彫刻等の実空間表現にも至ります。今でも生き続けている基準です。以来、作品タイトルに「造化」を使っています。

しかし、造形の自立、ないしは絶対造形を求めていく過程で、やがて何か不足を感じはじめていたのも確かです。その不足を埋める作業として、創作活動と平行してアート展の企画を始めました。個人制作と企画活動との往復によって、今日の立ち位置が定まってきたと言えます。

「アートハウス」の設立

1987年より「アートハウス」を設立し、自分以外の作家の企画展を開催。アートの社会的定位置を求める活動を始めました。これには三つの出来ごとがきっかけになっています。

ひとつは金子英彦氏との出会いです。

山間地の高校で教員をする傍ら作家活動をつづけ、東京とは縁遠くなっていたものの、逆に群馬の現代美術系の作家たちとの交流が生まれました。あるとき誘われたグループ展で、金子英彦氏[3]からこんな発言で論されました。「何の目的も、社会性も持たない芸術を持ち込む展覧会に立ち会うよりも、経済論文を読む方がよっぽどましだ」と。

私にとってこの言葉は当分の間「？」のままでいました。

もし、彼の活動の詳細にご興味があれば、まとめた論文がございます[4]。吉田までご請求下さい。（そういえば、一昨年の沼田でのアートフェスで、千賀子さんの彫刻の周りの壁に金子氏の作品がありましたね）

二つ目は、作家たる態度で活動しながらも教師の役割に立ち戻ってくる。

沼田高校（金子英彦氏、及び沼田アートフェスでの商店会長や市役所職員面々の母校）へ転勤となり、多くの教え子を芸大、美大、筑波大、教育美術系大へと送り込みました。数年が過ぎたときに、間もなく大学卒業する彼等の中で、僅かでも誰か里に戻る者があるならば、かつて私が励まされたように、その逆の役割を自らが演じねばならない自負に駆られたのです。活動の道しるべを論していただいた諸先輩方の恩を、社会へ向けて返すつもりでした。田舎へ帰って孤立する若者に、たとえ点ほどの小さな存在であっても、地方からでも作家活動が出来る勇気と、全国や世界と結ばれる可能性を示す責務の自覚でした。

アートハウス活動が、自分以外の作家の企画を通して、表現者とは別の立場、企画者に身を置くことが出来たことが、活動を社会的定位置にまで押し上げることに成功した秘訣だったと思います。（この活動の詳細にご興味があれば、まとまった出版物がございます。吉田までご請求願います）[5]

この活動を通して、全国あるいは海外の美術運動にも触れられるようになり、ようやく金子氏の意図する意味が解ってきたように思います。

三つ目が協力者の出現です。

学校アルバムで長く付きあいのあった写真館の専務に、余談として上記の念いを打ち明けたところ、意気投合してしまう。まさに出会であるが、彼女は若いときに金子氏の文化サークルに所属し、彼を信望していた。さらに、予てよりすすめていた新社屋建設を機に、ロビーの壁面に飾る絵画（オープンに合わせ金子英彦氏の作品が設置）と、何らかの文化発信活動を求めていた。お互いに、天から降ってきた幸運に嬉々。新社屋の落成日にアートハウスはその一室に同時オープンし、初期活動の2年間をそこで過ごしました。

写真館へ立ち寄った理由が、現職を離職しトラバーユするための書類に必要なポートレートの撮影が目的であったのも不思議な切っ掛けです。アートハウスは沼田への置き土産であり、縁つなぎでもありました。

後に、活動の継続はさらなる協力者を呼び込みます。1995年より朝日印刷工業の協力が得られ、活動スペースと印刷物の提供がなされます。安定した活動を維持できるようになったことで、芸術の社会性は大躍進します。同時に、社会的な発言力も持ち合わせることになりました。

社会的な力とは、その作用が私的なものから公的なものへと質的変化を持つことを意味します。芸術活動が個人的な表現に留まらず、社会的問題へとシフトしなければならないことに、もっと早く気づき、はっきりとした態度を表明すべきだったと、今更に反省しています。

2001年に最後になった企画を終了し、崩落したアートハウスのメンバーとの会合で総括したことは、この活動が「芸術社会でのコミュニケーションの確立を成し得た」このことを確認し、13年に及ぶ活動を休止しました。

外部活動からの刺激

アートハウス活動の過程で、幾つかの美術運動に触れられたことは、活動を推進していく上で大きな刺激となりました。

福井の美術運動（国際丹南アートフェスティバル　代表：八田豊）に触れたことは大きな収穫でした。

ここでは地方美術運動の特異な例として、土岡秀太郎が中心となり戦前より荘美が、戦後は北美が活動し、その後今立紙展、丹南アートへと連綿なる活動が続いてきたことの理解は、個人主義のカテゴリーでは汲み取れず、ソーシャル・キャピタルの概念（相互扶助の問題）を認める場面でした。地域を永続的な活力で蘇らせる手立てが地方の繁栄には必要不可欠です。

例えば、参考になる事件として：
彼等が主催した全国公募のコンペで、地元優位の審査がバレて、他地域からの出品者に背を向けられてしまう事態が起こりました。

コンペが公平であることを出品者が願うのは当然であり、その意味では確かに不正です。

しかし企画推進者の立場に立てば、そもそもこの美術運動の趣旨が地方の興隆に置かれており、コンペはその手段でしかない。地方から文化発信し続けるには後継者の養成が急務であり、そのためにはこの地の若者にも舞台の壇上に上げる必要があったと思われます。この使命が不可欠であることを理解すれば、憤慨する必要はなく、もっと寛容になれるのにと思うのは私だけでしょうか。

混乱は同じ舞台に、両方の意義を区別なく置いたことだろう。衝突を避けるには、別仕立てで特別賞（地域貢献賞）を設けるだけで解決することだったのかもしれません。

さらに、ここで重要なことを発見しました。芸術運動の推進と地域産業の復興との関係が読み解けたことです。

衰退の一途を辿った越前和紙が、今立現代美術紙展（1979～）の成功により、再起し復興した事実が認められました。これは今立紙展が海外からの出品者を呼び込み、注目を集めるようになります。すると50軒にまで落ち込んでいた今立の和紙事業所は100軒にも倍増し、産業が復活したのです。ほぼ崩落しかけた和紙産業が、グローバルな文化視点に置き換えられたときに、世界中から自然主義回帰への欲求が寄せられて、小さな需要が一点に集中し大きく膨らんだ例です。面白いことに地元作家達は、私が指摘するまでこの事実関係に誰も気付いていなかったことでした。

芸術家の自己に向かった制作行為とは別に、ひとつの芸術運動が社会性を帯び反響をもたらしたのです。

逆に言えば、企画には明瞭な社会的意図があれば、社会貢献の可能性があるのです。つまり、将来に向けた目標が明瞭な場合、目的の意義は企画意図となります。したがって、芸術行為には目標・目的を持つ必然があるのです。

異文化に触れて1（イスラエル）

もうひとつ、イスラエルの作家兼キュレーター、レヴィヴァ・レゲヴとの出会も世界観を一回り大きくしてくれました。

彼女は1991年に「イスラエル現代彫刻展」を原美術館に持ち込み、イス

ラエルの現代美術をはじめてまとまった形で、日本に紹介した業績があります。そして、その数年後にはテーマを自然素材に絞って、我々をイスラエルへ招いてくれました。'96 年の「日本の現代美術 " 自然 - 素材と表象 "」です。イスラエルでの日本人作家のまとまった展覧も、はじめてであったかもしれません。

その翌年、アートハウスとインフォミューズが共催し、二会場で彼女の個展を展開しました。その際、彼女は講演で、「イスラエルの作家は、おしなべて風土をもとに制作している」と述べられました。

この一説により、ユダヤの 2000 年の過去から現在までの歴史、そして将来へ向かう民族の執念の野望を伺い知ることができました。ひとつの目的が前提にあり、すべての行動がなされている。土地（国土）に執着する途方もないユダヤの計画であることが読み取れます。尚、この陰に潜む国際金融のルールさえも、この目的の計画に含まれると見て取ることができましょう。

これらの経験から、アートハウスを離れての幾つかの別の活動があります。

群馬県の片田舎の甘楽町から行政主催の行事で呼ばれた際、講演会と同じテーマの展覧会「地域産業と芸術展」（1997）を企画提案しました。出品作家はイスラエルのレヴィヴァ・レゲヴ、福井の美術運動家の八田豊、そして甘楽町在住の繭を素材に立体造形する齋藤光晴、彼等を結ぶ吉田の 4 名の構成です。講演は町の重鎮をはじめ数百人の聴衆を前にすすめられました。

滅びゆく養蚕業の再起への一手段として、越前和紙の復興を例に紹介し、国際的需要に応えていく文化事業を提案しました。蚕業復活が芸術を通して可能であると示した訳です。いきなりの提案なので戸惑いが勝り、反響はいまひとつでしたが、地域復興の方向と可能性は示せたと自負しています。

異文化に触れて 2

もうひとつ、アートハウス活動とは別仕立ての対外的な活動で、経済開放以降の中国（中華人民共和国）と交流し、同胞主義に打ちのめされたことも良い経験となりました。

一回目の中国交流（1995 年：鎮江 Zhenjiang）

留学生からの紹介で、相互に相手を招聘しあう二国間交流個展を試みたことがあります。

その留学生と彼の保証人で中国通の会社社長のアドバイスのもとで、慎重に手紙をやりとりして交流の条件を整え、私は国費？（地区共産党からの招聘）として中国へ招かれました。地区の共産党委員長や江蘇理工大学の学長、近郊の芸術高校の歓迎会等、連日のパーティーが続き手厚く歓待されたように思われます。ただ少々気になったことは、展覧会会場の再訪は撤出日まで許されなかった。

江蘇理工大学の講堂での講演会では、大勢の学生と教師たちの前で日本の現代美術史を講じました。付け焼き刃の内容であったにもかかわらず、反響は大きかったようです。講演後の談義も芸術以外の産業や社会の問題等に及び、夜が更けるまで盛り上がりました。

帰国後、今度は返礼として中国人画家、田 志鴻 副教授を迎える番です。我々は政府要人をスポンサーにすることはできず、社長の協力を仰いで民間の任意団体を組織するのが精一杯です。市民ギャラリーに作品を展示し、彼の来日を待ち構えました。しかし、中国の画家は予定日を大きく遅れて来日、展覧会期間は終了してしまう。にもかかわらず、外務省の文化交流条件に終わらず（勿論、講演料は用意したが）、しっかり稼いでいきました。

ビジネスに動いたのは、本人ではなく日本に居る同胞たちの働きでした。同胞の結束は我々の誠意の裏を返し、遠かに有効に働く意思であるようです。つまり、彼は一個人であるが、彼を取り巻く同胞はある種のシンジケートでもあるのです。大陸で生き抜く彼等の知恵を見せられた思いでした。

このときの率直な感想は、アートハウスニュースに記しています [4]。

二回目の中国交流（1997 年：上海 Shanghai）

その後、別のルートで上海大学美術学院と接点を持ったことがあります。このとき私は力めて通常の交換条件を逸脱し、上海大学組織の推薦作家の招聘受け入れを拒否。それに替えて中国の前衛的現代美術家を自らの目で選ばせて欲しいと申し入れしました。

すると、学内講演会には学生と通訳担当の外事弁以外に、関係学科の教員に出席者はなし。個展初日の歓迎レセプションは行われたが、翌日から会場は閉鎖されてしまいました。

中国との交流を押し並べてみると、彼等は個人以前に組織人としての結束が強く、同胞や組織の利益をとても大事にしている。さらに、美術を東西（中国語で品物の意）として捉え、交易を目的にしたコミュニケーションの手段としているようです。

私が中国との交流をアートハウス活動に持ち込まず、個人活動で試すことにしたのは、この活動が経済の解決に至ってなかった訳ではなく、どんな作品をつくる作家が送り込まれてくるか不透明で、不本意な結果に内部的な混乱が起きる危険があり、その不安が大きな理由でした。当時のアートハウスは、作家の生き様やアート概念と作品表現に主眼きしていたからです。

次に、美術を史的視点から考察してみましょう。近代化、つまり産業革命以降の資本主義と自由主義の狭間での美術の問題です。

大雑把に捉えれば、産業革命はルネッサンスを経過した後の大きな変化。つまり、科学技術（航海術、天文学、etc.）の進展の成果として、欧州の国際時代に相応しい経済のあり方として資本主義が確定された。これと相まって、啓蒙主義の反映でとして民主主義があると言えます。ある種その理想主義の共産主義・社会主義はその成長過程で、奇しくも立ち枯れたのは遺憾に思いますが。

その成果と言える美術に関わるケースを挙げてみましょう。

バウハウスが美術概念からデザイン機能を分化したと言われています。それは、産業革命後の不統一で粗雑な生産品に、質的規範を持ち込み製品の完成度を向上させ、創造性の優位を決定づけた。その産業的成果としてデザイン概念が成立した。これにより、例えば戦後の米国工業デザインの発展があるし、国際工業規格 ISO や日本の JIS が制定がなされたのです。

ここで取りこぼしてならないことは、バウハウスは芸術の創造性をもって積極的に産業と関わったが、創造的な自由を生産する機関として社会的影響力を持ったが故に、台頭してきたナチスから迫害されたことです。

同時代に、バウハウスと関連してデ = ステイルやロシア = アバンギャルドが活動しています。デ = ステイルは同名の雑誌発行を通して全欧へ最新造形概念と方法論を伝えるメディウムの役割を果たします。また、ロシア = アバンギャルドはロシア革命と共産国家樹立に向かった推進運動の中で昇華し、逆に国家統治が始まることにより抹消されてしまう。

さらに面白いことは、これらの活動の発生が第一次世界大戦の文化的不毛の期間を挟んでおり、国際文化都市パリではなく土俗な文化を残す周辺の地で起こっていることに注目していただきたい。

美術は民主主義とそれを解決するカテゴリーにおいて、彼等は完全なる造形（絶対造形）を導き出しました。つまり、抽象造形芸術や構成主義芸術です。初期の絶対造形主義は、個人の主観を超越した客観を絶対に求めることでありました。その精神的活力の源がアミニズム（自然神）にあると思われる。

天と地がひとつに結ばれるところに人間が暮らす理想の構築が求められる神的絶対性から察しられるでしょう。この考え方は欧州のケルト文化の半ば密教化された自然神崇拝に潜まれていると思うのです。日本の修験道や山岳信仰などもこれに含めて考えられます。

おそらく、この意味において、貴兄の作品は造形的であり、「心地よい形、美しい形の追求」がなされているのだと思います。吉田の「造化」も同様な考えです。

しかし、抽象芸術がすすめられる過程で、文化がパリに差し戻されてから結成されたアブストラクシオン・クレアシオンにより湾曲した解釈がなされ、アミニズムの精神が抜け落ち抽象画スタイルという形式主義に陥ってしまう。あるいは個人主義から発生した利己主義に則って主観の芸術とされる。（そのためか、しばしば抽象画が図案や模様と同義に扱われるケースも多い。あるいは、分けの解らない主観の美術の隠喩とされてしまう）

その結果、近代芸術は個性、自己表現、オリジナルという利己的概念で括られる表現形式に思い違いがなされ、自らその発展を閉塞してしまう不幸を背負い込んだように思われます。

また、シュールレアリズムの発明は、個人的な深層心の開示に社会権を与えた。その一方で原体験という逃避的捌け口に主権を獲得、これを芸術に携わる者が特権化させて個性としてしまうと、これは過ちのように思えます。

もちろんアイデンティティ確立の基盤に原体験が位置するのは言うまでもありません。ここで言いたいのはシュールレアリズムが人間の深層に潜む未知の世界を切り開いた評価を否定しているのではなく、むしろ高く評価するが故に、原風景での眺めを個性に直結させてしまう短絡を問題にしているのです。確かにそこには感傷的想像は豊かで、極めて個人的な意味での想像的自由が果たされていますが。

個性とは、誰に許されているのかを考えてみて下さい。神ですか、社会にですか、それとも貴方自身の中だけですか。

もしかしたら、この問題は支配者の社会統治により許された被支配のカテゴリーとして人びとの安全地帯を形成しているのではないか。市民意識が個人的問題に終始している限り根源的問題に及ばず、支配者にとっては好都合であり、彼等の社会統治手法に利用される。つまり、我々の認識が芸術を個人的問題として近代芸術概念の中心に据え置いている限り、想像の楽しみはあっても創造的エネルギーは欠如したままであるのだと言いたいのです。

次は、別の角度から診てみましょう。今日の近代国家の経済基盤が資本主義にあり、社会基盤が民主主義であることは誰も異論はないでしょう。

民主主義は自他の関係において尊重される社会概念であると思います。では、民主主義が民衆にもたらしたひとつの個別概念が個人主義であるならば、私的個人主義はしばしば他を無視し、社会的個人主義を歳ろにしたときに利己主義へとシフトします。つまり、相対する他に手掛かりを欠いた状態ですから、逆転視すれば自己を見失った状態ともいえます。ここに充てはめられたまやかしが、個性、自己表現、オリジナル等の個人の一方的主張になるのです。この解釈は如何なものでしょうか。

勿論、自我の確立は民主主義社会での個人認識の基本であり尊重されるべきです。しばしば自己表現が唱えられたのは、自他を対立概念で捉え、相対を対等と認め合うことによって発生する差異の確認からです。つまり、自己表現は自我の確立に際する自己認識においてなされるのであり、他を排したり、圧する武器ではありません。

オリジナルの主張は自他の対立から起こった利権の衝突。利益、版権や特許等の経済資本主義のカテゴリーのことです。また、個性は自我と自己を差し替えた混乱で個の短絡した過ち。したがって、芸術における個性、自己表現、オリジナルの主張は、私的個人主義の独走であり、利己主義の概念に含まれてしまったと考えられませんでしょうか。つまり、過剰な自己主張は自他の対等を見失っており、民主主義を崩壊してしまう。

個性は醸し出されるもので、自立するものではありません。

文化は模倣の原理によって継承されます。その意味において芸術のオリジナリティは尊重されますが、模倣されて継承されることで意味を持ちます。したがって、文化を継承して暮らしている世の中において、利己占有されるオリジナルは存在しません。ただあるのは、アイデンティティを持った創造性。これが芸術の根源であることに気付きさえすれば、さほど惑うことでもありません。本来、オリジナルとは互いに模倣し、分かち合う対象です。

日本における近代化政策は文明開化から始まります。

この政治的大革命を資本主義 + 民主主義と置き換えた方が誤解が少ないと思います。国策によってもたらされた概念と方法は、下積みの醸成が間に合わないまま民衆の間に移入され、形の模倣から入り社会資本を経済資本に読み替え、民主主義の自由を私的個人主義で解し、権利を特権や利権に限定した功利主義に陥ることで利己主義を生み、社会に混乱をきたしてきました。

ようよう 100 年も経た頃に、その意味が我々にも理解されはじめてきたのではないかと思うのです。

その間の混乱について若干触れてみてみましょう。

戦後の自主独立を求める安保闘争と平行して、アメリカナイズされた自由の氾濫が混乱を誘い、個人の好き勝手な振る舞いが出現。すると、抑止力が働きます。統治統制が進められると、芸術表現における重要な問題も抑制され、我々民衆は骨抜きにされてしまいます。

60 年代アートの一例を引けば、赤瀬川源平の千円札騒動は法廷での審議の結果「金券の模倣それ自体が由々しきもの」とされ有罪となり、芸術であっても政府や日本銀行、社会を騙れ動かすものは御法度とされました。

この法的判定により、市民は自然の摂理に矛盾する政府の政策行使や支配者による社会の揺動に対し批判を止めてしまう。日米安保条約の追従や憲法（自然の摂理に批准して制定されているとされる）改正の動向にも従順な良民となり、本来芸術が持ちうる自由（ときには反逆的）な精神や主張、行動さえもなし崩しにされた。

また、アート市場では、政財界での賄賂の換金商品として美術作品の需要と供給のシステムが確立。あるいは投資評価される対象の選定に一部の画商が特権を握り画壇を形成する。他は商品として流通し易い様式のものに限定され扱われる程度。企業の利益を生む産業美術（デザイン）でない限り市場経済に馴染まないとして、造形価値や創造的行為は切り捨てられました。

芸術から重要な部分、政治や経済が切り離され、社会とのかかわりが省かれてしまうことで、個人の自由は絵空事（趣味や遊び）として認められ、文化として世論や因習を形成し社会に定着してしまったように思えます。

今日までに、純粋芸術は政治や経済から切り離され、個人的な極めて内向した意味で自由を獲得し、趣味やニートの次元で個性、自己表現、原風景の探求に制限され取り扱われてきたのです。このことは戦後に民衆の間で流行る文化の消費構造（ファッション）として捉えれば理解しやすいでしょう。

また、芸術が経済や政治、社会と関係を持つことを邪念とする道徳的風潮さえ定着してしまいました。これは安保闘争の後の民衆の平和願望が、支配者に逆利用された政策にはめられているのであり、経済成長が安定していた甘味な時代に、我々民衆がコンセンサスを得られていたかのような思い違いをした、特殊で偏屈な定義「芸術（美術）= いい御趣味！」の落とし穴に嵌まっていたのでしかありません。

本来、芸術には個人の利害よりも、もっとスケールの大きな領域を扱う機能が与えられていました。

ところで今日、経済資本主義が衰退する最中、私的個人主義は行き詰まっているのに、未だに造形芸術が個性、自己表現、オリジナル、原風景の探求に限定されたままであるとしたら、それこそ時代錯誤ではないでしょうか。そればかりかデザインでさえ、産業革命と民主主義の狭間で育った産物でしかありません。芸術が支配者により擦がはめられ、制限された概念で継承されている限り創造的とはならず、現代芸術とは言えません。

この危機的な社会状況の中で見えてきたことに如何に取り組むかが、創造性を発揮する必然であり、芸術が進むべき方向だと思うのです。我々は新しい時代の秩序の構築のために芸術をしているのであって、政治にも、経済にも、宗教にも、エコロジーにも、まちづくりにも、貧困や失業の問題にも、、、もっと積極的に社会と関わってもよいのではないでしょうか。

芸術の創造性とは、過去を検証して今を嚆々と活き、未来を拓くことなのですから、本来は形象だけの美を求めるのではなく、はたまた個人的な内証に留まることなく、社会性を伴う必然があることなのだと思います。

このことに関連して、豊実（新潟県阿賀町）のコスモ夢舞台「里山アート展」について最近提出したレポートがありますので添付します [5]。

「自力更生車 + α 計画」は、芸術のあり方、その根源を探る上でのほんのささいな手法の一歩でしかありません。

所詮、無能者の唱えるこの程度の試みは、将来の肥やしの微塵でしかないでしょうから。今後、我々よりも遥かに優れた芸術家が次々と現れ、時代がすすめられていくに違いありません。芸術家はこれまでよりももっと大きな目標を持って次なる時代を夢見る役割を担っているのだと思います。

＊本稿は「社会芸術 " 自力更生社 + 計画 " 2010 in 宇都宮」企画に当たり、安部大雅氏へ勧誘のために送ったメール文（2010.1.17）に、註や年号を補足、加筆修正した。

註 1　金子英彦（1923—2010）
金子氏は沼田市出身。沼田で書店を経営する傍ら、前橋に画廊を開設した後、事情があり欧米巡遊後、鎌倉で暮らす。画家としてポップ絵画でシェル美術賞一席を受賞（'64）。読売アンデパンダンへの出品やテーマ展の企画を繰り返す。作家と言うよりもプロデューサーであり芸術運動の指導者。60 年代に前橋で結成された「群馬 NOMO グループ」を指導。読売アンデパンダン終結と時を同じくして群馬アンデパンダンを企画しアンデパンダンの地方飛び火の一役を担った。
また、この群馬 NOMO グループのメンバーに青年であった加藤アキラ氏もいる。

註 2「群馬における戦後、前衛美術運動の軌跡と行方」 吉田富久一　群馬県立女子大学・特別研究　調査報告書　2000 年

註 3「ようこそ " アートハウス " へ　1987—1998」アートハウス 10 年記念　1998 年

註 4「珍粉糜粉」 吉田富久一　ART HOUSE NEUSE vol.20　アートハウス　1995 年

註 5「ソーシャル・キャピタル　地球主義による夢の実現」 吉田富久一「里山アート展 2009」コスモ夢舞台ブログ　2010 年

生活レベルからの芸術の社会貢献

芸術活動が、結果的に社会に貢献することは、当然大いにある。

それはどういうことかといえば、美しい世界あるいは、真実の世界、精神的な世界を人々に提示して、人々に感動を与えるという意味で、芸術は社会に貢献していると思う。

生活レベルから、これが高い低いということによって、芸術から受ける感動の機会も多くなったり、少なくなったりするであろう。従って、生活レベルでの社会貢献は述べるにきわめて困難に思える。

今日の日本社会は、自らが創造するものにとっては、心からの自由のない不安な社会である。たとえば、社会を変革しようとしても、きわめて変わりにくい現実があると思う。

そんな中で、芸術の社会貢献は、実ることは少ない。

私は、悲観的であるが、しかし、一方では芸術が強力に社会貢献できて、社会が変われば、これはすばらしいことである。

ギャラリー・イン・ザ・ブルー　　青木 俊子

写真／玉村町平塚モニュメント　1997年（設計・監修　吉田富久一）
制作した彼によるインスタレーション 撮影　2010年12月28日

モニュメントの中心にある45.5トンの巨石をとりまく池は、地軸の回転により発生する水と空気の運動（自然に内在する力）を活用し、浄化装置の給・排水口の向きを調整、池にダイナミックな流れをもたらしている。

おわりに

だいぶ以前、「気の抜けた美術に立ち会うよりも、経済論文を読む方がずっとおもしろい」と、金子英彦は話してくれた。その言葉は、それまで芸術が自己表現と思い込んでいた私にとって、長い間、解読できぬまま頭に焼き付いていた。金子との出会は、1981年の同名のグループ展「1981展」でのこと。以来、群馬NOMOグループ（1963～69）の作家たちを交えて会うことが度重なり、彼はその都度、芸術によるコミュニケーションを繰り返し訴え続けていた。

人は誰も自然の一部に含まれる。山に入り暮らすことで、山を眺める視線に変化が起きた。己を含め人の営みを支える万物の存在が大地に依存していることを識る。かつて、70年代の末より数年を山間地で過ごした経験から得た創作の態度、「造化」の概念に至った。その直後の金子との出会によって、芸術の目指す方向が決定づけられたように思う。

やがて、それが発端となり、アートハウスの活動を始めたのが1987年のことである。現代美術を市民視座でとらえ直し、美術展を市民と共有する企画活動をすすめた。活動と生業（私の場合、この活動と作家と教職）の両立を経過させ、どうにか成し得たことは、芸術社会でのコミュニケーションの確立であった。しかし、2001年まで続けられた活動は、不覚にもその前年の2000年に自らの躓きで失職の憂き目に会い自滅、崩壊に到る。

ひとつの活動の終焉が、皮肉にもその先を見通す機会をもたらした。

原点に立ち戻ると、「近代芸術の個の概念に留まっている芸術家よりも、創造性を持ったまちびとの方がよっぽど創造的である」と思えた。コミュニケーションの対象は芸術の枠を超えた社会にある。そこで、芸術の創造性とまちの創造性を結びつけようと、賛同するまちびとを頼りに2002年に「社会芸術展"THE市場"」をたちあげる。だが、その時点では、先へ進めるには社会における芸術の位置づけが曖昧で、概念構築が未熟であった。

その後の活動に、自力更生（車）を展開しつつの旅の過程で、2008年になってソーシャル・キャピタルの本と出会う。芸術の社会性を考察しつつ、今回の宇都宮での企画に望んだ。そして、ようやく考えをまとめるに至った。

人は、自然の創造にふれることによって、他者と不可分なことを識る。創造性を分かち合うことで人は他者と信頼を深め、相互に敬意をはらうことを識る。創造性は自然を尊び共に生み出す力が根幹（アイデンティティー）をなす。根としての創造性を共有する信頼。これこそ社会資本としてのソーシャル・キャピタルであり、本来の芸術活動が向かうべき方向であると考える。人として、どのように大いなる自然とかかわり、そして社会と関わっていけばよいか。衰退する経済資本主義社会のなかで私的個人主義に陥った芸術概念が揺らぎ、社会的個人主義を回復させるひとつの芸術の考え方である。

この小冊子を手にしてくださった方に、すこしでも心の余白に創造のインスピレーションを受け取っていただけるならば、何よりも幸いである。

後手になってしまったが、主催の ギャラリー・イン・ザ・ブルー をはじめ、宇都宮オリオン商店街の長島俊夫氏と長谷川正氏、商工振興課の日向野氏、宇都宮大学の廣瀬隆人氏。快くご執筆に応じていただいた埼玉県立近代美術館の中村誠氏、宇都宮大学の本田恬郎氏、新潟市立北区公民館の佐藤晴夫氏、地元の高橋靖史氏や滑川五郎氏、平出晴夫氏、他多くの方々からの温かい眼差しと勇気いただいたこと。そして出版に関してEU・ジャパンフェスト日本委員会の古木修治氏はじめスタッフの方々には多大なご協力をいただいたことを、ここに感謝の意を表したい。

社会芸術　吉田 富久一

編集後記

ひとつの理念を具現化しようとした場合、しばしば関わる人たちに軋轢を与えることがある。軋轢は個々の生き様との理念との衝突であり、概念の多様性を一括りにできない裏返しである。

この度、程度の差があるにせよ宇都宮に参集した11名は、その概念が理念との葛藤の末、自ら参加を判断し、時空を共にした先鋭達である。であるが、実際には往々にして理念の具現化は挫折し、また裏切られるものだ。逆に、思わぬところから理解者や協力者が現れ、新たな展開が始まりもする。参加者の事後コメントは、ことの真相を探る上で貴重な手掛かりであろう。

ただ、この企画が芸術の社会性の回復を考えるきっかけとなり、我々は利己主義を乗り越え、人びとと創造性の共有を願うのみ。

写真：高橋靖史、長谷川千賀子、吉田富久一　　翻訳：青柳美絵　　編集：長谷川千賀子、吉田富久一
表紙写真／宝ヶ丘公園（栃木）　撮影：長谷川千賀子

川
その流れは
ひとつのところで
つながっているのかもしれない

闇のなかで一点の筋がひかる時
その道をたどる

人間の創造性が唯一の資本であるなら
その流れは　ひとつのとことへつながる

共にあること
つくること

展覧会概要

タイトル：社会芸術"自力更生車＋α計画"2010 in 宇都宮

会　　期：2010年4月17日(土)～27日(火)　10a.m.-6p.m.　日曜休館日、まちなか展開

会　　場：ギャラリー・イン・ザ・ブルー
駅東3号児童公園
オリオンスクエア
オリオン通り（曲師町、江野町）

主　　催：ギャラリー・イン・ザ・ブルー／代表：青木 俊子　担当：高橋 宏美、菅野 友理枝
〒321-0953 宇都宮市東宿郷3-1-9　あかねビル1F
tel.028-635-5832

企　　画：社会芸術／代表：吉田富久一　スタッフ：長谷川千賀子、田中清隆、川島茂雄

助　　成：EU・ジャパンフェスト日本委員会

協　　力：オリオン通り商店街（線）、オリオン通り商店街（協）、宇都宮市産業振興課、
廣瀬 隆人（宇都宮大学生涯学習教育研究センター）、本田 恬郎（宇都宮大学講師）、
中村 誠（埼玉県立近代美術館主席学芸主幹・SMF事務局）、
佐藤 晴夫（新潟市北区公民館館長）、高橋 靖史（現代芸術家）、
かや及ぎの家、大谷パウハウス、平出 晴夫

参 加 者：安部 大雅［Pizza Mobile］、南守 和佳子［土和夢］、加藤 アキラ［出前ギャラリー］、
川島 茂雄［竹屋のしげちゃん］、クラウン＊ミーナW.S.P［無垢の魂］、
小越 正博［＋@ アポロ99 号真夜中のサーカス団］、
田中 清隆［光の仕事 そして「感場所」プロジェクト］、沈 玲美［歌のコーナー］、
長谷川 千賀子［七輪堂］、吉田 富久一［社会芸術－自力更生車］、
渡辺 恵美子［ふわふわ堂］
50 音順

プロフィール：社会芸術

2002年、社会芸術を東京都調布市に設立し「社会芸術展"THE市場"」を企画開催。街生と調布のまちびとの活動を結ぶ。可動式仮設店舗を登場させ、店舗の他、ナイトシアター、ファッションショー、パフォーマンス等を展開。

2004-05年、地球の「キープンカフェ」に参加し、グリーン大通り全域でアート展開。2006年には、調布市文化会館たづくりでの「新井淨一の世界展」をコーディネート。まちなかとの連動企画とする。2007年は「神戸ビエンナーレ」に参加し、コンテナ内のざわめきをカメラアイで捉え生中継、Web公開した。2008年の「国際アートフェスtin NUMATA 2008」では。沼田市街地を中心に企画の一端を担当。自力更生車＋メンコ屋六文堂のユニットを登場させる。その後、宇都宮展開までの間にさまざまなイベントに自力更生車で参加。2009年、新潟市での「阿賀野RIVER龍神祭」へ大型オブジェ「大地の鼓動」とともに、自力更生車も七輪堂を加え出動。2009年には埼玉県立近代美術館企画の「アートのわっ！近遊美術館」では参加増員し4台に増える。社会芸術の「自力更生車＋α計画」の礎が整えられた。

2010年に至り「社会芸術"自力更生車＋α計画"2010 in 宇都宮」が開催される。7台の自力更生車と11名の芸術家が集結し、画廊を拠点にまちなかへ繰り出す展開を実行した。

今年2011年は、新たに「龍神プロジェクト2011」を立案し、阿賀野川流域の「阿賀野RIVER龍神祭」と「里山アート展」の2ヶ所と川越の蔵でのアート展開を予定。

人間は自然の一部であると捉え、創造の根源をそこに定め、社会資本を経済のみならず創造性ある領域に置き、芸術による社会貢献を探めていく。

発行：社会芸術
代表　吉田富久一
〒182-0022
東京都調布市国領町 1-19-4　1A
090-8301-5811
pwd4nt2ev@me.point.ne.jp

© SOCIAL ART. 2011

EU JAPAN fest
助成：EU・ジャパンフェスト日本委員会

FUKUICHI YOSHIDA, SOCIAL ART

龍神プロジェクト 2011 in 阿賀野川

阿賀野 RIVER 龍神祭 2011

全長 40m の龍神御輿が阿賀野を舞う

聖人の衣装

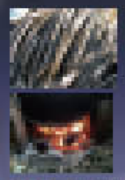
海の万華鏡

大地の記憶

「龍神プロジェクト 2011」は
自然を畏敬し
ひとの根源を創造性に置き、
社会の再構築を模索する
社会芸術の一環です

イメージの龍

炭



炭材は身を犠牲にし炭と成す

炭焼きは、古に龍神より授かった生活の知恵

コスモ夢舞台　星山アート展 2011

籾殻炭アースワーク

32 日間 燃え続け、龍の姿を大地にマーキング

「現代美術と炭づくり伝説との出会い」

炭による龍の気配

インスタレーション

「CONTEMPORARY ART NOW -川崎-」

夜明け
ひとりひとりの旅の時間
朝もやのなかでは
すべてが
ひとつだ

JOURNEY OF THE SELF-POWERD CART

Profile : Social Art

In 2002, we established Social Art at Chofu-city in Tokyo, then planned and executed "Social Art Event 'The Market'". Made Temporary mobile shop's debut and had been expanded this idea of shop. In 2006, at "International Art Festival in NUMATA 2006", we were in charge of planning at the site of Numata city area, then we brought self-powered cart there. In 2009, we brought self-powered carts to "Agano River Ryu-jin (Dragon King) Festival" held in Niigata-city. By the time of appearance at "Circle of Art, excursion museum" planned by Saitama Modern Art Museum, our base as Social Art, named "Self-powered cart + α Project" was established.